日向国延岡藩内藤充真院の旅日記から見る関心と人物像

――「五十三次ねむりの合の手」を素材として――（2・完）

神崎直美

計[1]」と、充真院らの通行を人々が軒下の暗がりに屈みこんで見ており、夕暮れ時であり視力が弱い充真院（六章に後述）にはその様子がよく見えないのだが、やはり自分たちは人々から見られて騒がれる一方であり、しかも道沿いの家は既に通りに面した一階の戸を締めているが、二階から充真院らを見下ろして眺めているというのである。庶民らが貴人を騒ぎながら見たり、ましてや二階から見下ろすのは失礼な態度であるが、おかまいなしなのである。

同月二十三日に伏見（山城国）の町に到着した時には、「両かはに人多く、夕こく故、涼なからに候はん、幾むれとなく人打寄[2]」と、通行している充真院一行を、夕涼みがてらに見ようと大勢の人々が寄ってきた。そして、充真院一行が本陣をなかなか見つけられず探しながら進んでいると、「末には通り道も無やうに人多く」と、次第に一行を見ようと集まった人々が多くて道を塞ぐほどあふれかえってしまったのである。翌日二十四日も、宿を出発して船着場に向か

四　注目される立場

充真院は大名家の一員であるゆえ、旅先で何かと人々に注目される立場にある。大名家の姫として生まれ育った充真院は、宿命として注目される立場を受け入れており、「五十三次ねむりの合の手」の記述からは人々から注目される事に動じる気配は見られない。しかしながら、時には庶民の物見高い態度や不躾な視線を浴びて閉口したこともある。

人々に注目された事に関する記述は「五十三次ねむりの合の手」に散在している。例えば、四月十九日に桑名（伊勢国）の宿に到着して、入浴と夕食を済ませた後に、宿の門前から近所を散策した時のことである。「通り人は軒下にかゝみてくらきゆへ見へす、やはり此方、みらるゝ計さわき候、家は戸を締、二階ゆへ見おろさるゝ

う折に、「行所の道はまた〳〵両方に、昨日の通、見物に男女共出居」と、前日と同様に大勢の見物人に見つめられる中を一行は進んでいる。[3]

注目される立場は船上でも同様である。例えば、五月九日の明石湊（播磨国）の様子である。「其辺の人、舟入を見るよりかけ来り、波とうの廻りよりして見物多」と、充真院一行の船が入港する様子を目に留めた人々が走り寄り、湊の先にある灯台の廻りに見物人が沢山集まった。[4]

注目される側の充真院は、それを好ましく感じる事もあれば、不快に思う場合もある。まず、好ましく感じた例として四月二十四日をあげておこう。伏見から淀川水系を舟で下り内藤家の大坂屋敷に向かう際に、「大坂へ入は、橋を多く越て行船を見付ると、見物之者寄合、誠に〳〵はれ〳〵敷」と、一行の船を見つけた大坂の人々が沿岸や橋に大勢集まっている様子を見た充真院は、実に晴れ晴れとした気持ちであると記している。[5]

尤も充真院は、見物している人々やその辺りの様子を眺めたく思い、「近辺見度、舟の障子を少し明のそくくらひの事」と身を隠しつつこっそりと覗いている。さらに、「見物の人は次第に多く成、舟の行方へたゝとろ〳〵かけ行もおかしく」と舟の一行を眺める人はますます増えて、船の進む方に一緒に駆け出していく者もおり、充真院はその様子を見て愉快に感じている。すなわち、充真院は大名家の一行として注目される事は好ましく感じるが、個人として必要以上に見られたくはないという意識を持っているのであろう。

次に五月十七日に瀬戸内海の六嶋（備中国）で起きた出来事を指摘しておこう。この時、充真院一行は海賊船と間違われたのである。充真院らは関船に乗って海路を進んでいた。六嶋に寄港した折に、関船を初めて見た六嶋の人々は、見慣れぬ船を海賊船と思い大騒ぎとなる。この様子は「此嶋抔には、せき舟抔入へき地にはなき故、浦之者は海そくかかやうな舟こしらへして来て、ぬすみ物にてもせんかと思ひて、先、生すなる魚には番を付、皆々用心してさわき立しよし」と記してある。[6]随行者の仲之介と泰三郎（両名については五章でふれる）が、ひとまず先に上陸して、大騒ぎしている島の人々に「関席舟の由をよく〳〵云聞せ」と、海賊船ではなく大名家の関船であることを説明して、ようやく島の人々は安心した。

大騒ぎした島の人々であったが、大名家の舟であることが判明して安心すると、さっそく見物にやってきた。「夫にて安心して嶋の人は大分はだかにて居しか着物を着、舟を珍らしく思ふ故、おかみに出るとて、岸には男女大せい出来る」とあるように、海賊船ではないと安心した島人は、当初は裸に近い恰好でいたが、充真院一行の舟を見るために礼を尽くして着物を纏ってやってきた。島人にとって関船と大名家の一行は珍しい存在なので、一目拝もうと大勢の男女が集まってきたのである。

島人の行動は物見高く一種の野次馬であるが、貴人の舟を見に来るにあたり、身繕いをして礼を尽くす事を心得ている。充真院がそ

の様子を見て、島人が自分たちを拝みに来たと認識しているのは、島人があからさまな好奇の視線ではなく、敬意を持った視線を寄せていると感じとったからであろう。

もう一例、快く感じた例を示しておこう。延岡に到着する直前の五月二十九日に嶋之浦（日向国）で、「其中は浦之者も見に、女子とも出候もましり」と現地の女性や子供までもが充真院一行を見ようとやってきた[7]。しかも、「本舟見に多人来るゆへ、窓明かね」と、充真院が乗船している御座舟を大勢の人が見に来るので、視線が気になり窓が開けられなかった[8]。

沢山の見物人であるが、その中の女性らは「少しは着かへしやうにて、きれゐにおしろい抔付て居」と、きちんとした着物を纏い化粧をして身繕いを整えて来た様子が見てとれた。これは物見高い見物人であっても、大名家の一行を目にすることは畏れ多く、一種の晴れの場と感じていたからである。同時に、充真院らに対して礼を尽くす気持ちの現われでもある。充真院が見物にきた子供らに「残りのくわし少々あれは、子供に遣しくれは」と、残っていたお菓子を与えたのは、子供好き（七章に後述）ということに加えて、見物人たちに好感を持ったからである。しかも、お菓子を貰った子供は、「御心付くらひの心持にて、いたゝき〳〵かへる」と、礼儀正しい振る舞いをしている。嶋之浦で遭遇した見物人の姿勢に対して、充真院は好感を持ったのである。同時に初めての延岡入りで出会った当地の人々の好印象は、未知の領国に対する不安を軽くすることとなったであろう。

一方、注目される事に不快を感じたのは、見る人々の態度が度を越えている場合である。四月二十八日に舟で大坂見物をしていた折、「岡にては舟にめつらしき人入と、見しまゝ、又人うちより、物見たかき地と思ひ」と、乗船している充真院らを陸から見つけた人々が、珍しがって集まって来た様子を充真院が目に留めて、大坂は物見高い人が多い場所であると自覚する[9]。さらに「余り物見たかきにうるさくて、所見物して行へしと思ひしか、誠にこも〳〵しく、夫よりは出す」と、充真院は大坂人のうるさすぎる程の物見高さに閉口し、本当は引き続き大坂見物に出かけたかったが、翌二十九日は見物を中止にして屋敷ですごした[10]。

大坂人の物見高さに閉口した様子は、五月一日の記述にさらに続く。充真院が大坂屋敷内の稲荷を御参りしていると、「直に通りの人こた〳〵と来て見と云くらひの物見高さ」とあるように、あっという間に大勢の人が通りから、屋敷稲荷を参拝している充真院を見にきた[11]。充真院は大坂屋敷の敷地内ですごしていても、大坂人の好奇の目に晒されたのである。

結局、五月五日に大坂屋敷を出発する時にも「例の門前には、又人々見物致候ゆへ、さゝいやなる土地ふうと思つゝ」と、また大勢の見物人に取り囲まれて、大坂は嫌な土地柄と思うに至った[12]。注目される立場の充真院が不快感を強く感じたのは、見物する側が度を越えていた場合に限られていた。大坂の場合は、当地特有の人々の

気質が原因だったのである。

大坂屋敷の門前から駕籠で本船が繋留している二丁程の距離にある船着場に移動すると、既に大勢の大坂の人々が充真院らを見物しようと集まっており、「見物の人、幾人共いわれぬ程居ならひ」という様子であった[13]。しかも無遠慮な見物人は、「其人共、我駕籠をのそきて、ほうさんしゃといふ、跡より来る人は、との様成と思へは皆なばゝさんしゃと云」と、充真院が乗っている駕籠[14]を覗き込み、充真院のことを「坊さんじゃ」「婆さんじゃ」と言い、相変わらず失礼である。充真院を僧侶と見誤った者がいるのは、充真院が短髪にしていたからである。充真院は自分の髪型を「我はほうつ」と記している[15]。駕籠を覗かれた件について、充真院は事実のみ記し、感想はしたためていないが、先刻門前から出発する際に「いやなる土地ふう」と感じた思いを弥増したに違いない。宿命とはいえ、注目される立場は忍耐を強いられることもある。

（1）　明大翻刻本、三〇頁。以下の伏見に関する引用も同頁である。
（2）　右同書、三四頁。
（3）　右同書、三五頁。
（4）　右同書、五九頁。
（5）　右同書、三七頁。なお、以下に続く大坂に関する引用は同頁からである。ところで、充真院が船で向かっている船着場についてふれておきたい。淀川を下り大坂に向かう船は、大坂の船着場である八軒屋に到着する。八軒屋は天神橋と天満橋の間にあった。八軒屋については『摂津名所図会』巻之三に説明がある。当該箇所は『摂津名所図会大成　其之一』（柳原書店、昭和五十一年）では一三～五頁である。
（6）　明大翻刻本、六八頁。以下の六嶋に関する引用も同頁である。
（7）　右同書、七九頁。
（8）　右同書、八〇頁。以下の嶋ノ浦に関する引用も同頁である。
（9）　右同書、三九頁。
（10）　右同書、四九頁。
（11）　右同書、四九頁。
（12）　右同書、五四頁。充真院が大坂人の気質に不快感を持った様子は、既に四月二十八日に確認できる。大坂見物で住吉大社から帰る途中に立ち寄った茶屋で部屋の間取りを見物した時に、大坂人の徹底した始末ぶりをまのあたりにする。宴会後の部屋を見ると、豪華な料理を注文した形跡がなく、酢の物もなく、少しの肴と丼に「おろし」ばかりを注文した様子が察せられた。「茶やに行ても、ものたへかへるなら ん、いやな所」と、大坂の人たちの吝嗇な様子に充真院は軽蔑すら感じたような書きぶりである（右同書、四八頁）。
（13）　右同書、五五頁。以下の大坂に関する引用も同頁である。
（14）　充真院はおそらく御忍駕籠に乗っていたと思われる。拙稿「日向国延岡藩内藤充真院の鎌倉旅行――光明寺廟所参拝と名所めぐり――」（『城西人文研究』第三〇巻、平成二十一年）の五一～二頁で、菩提寺参拝の七泊八日の旅で御忍駕籠を利用していたことを指摘した。なお、以下で右の拙稿についてふれる際、拙稿「鎌倉旅行」と略記する。
（15）　明大翻刻本、二〇頁。四月十一日に初めての長旅の為、御附の女性たちの多くが疲れから簪を落としたが、充真院は短髪なので髪が乱れようがなく、幸せであると感想を記している。

五　随行者と充真院との人間関係

「五十三次ねむりの合の手」は随行者を通称で記してある。通称

を記載された者は、充真院の身近に仕えていた者が主であり、その他にも名前が記されていない随行者が多く存在する。現在のところ、「五十三次ねむりの合の手」と藩士の由緒書類から三十四名の同行者が判明した。その内訳は、身内が一人、御附の女性が十四名、男性が十九人である。一行の総数は充真院を加えると三十五名となるが、この数は具体的に個人名が判明した者の数である。この他に船手方や料理方など職名が記されているが、その氏名や員数は不明である。したがって、右に示した数は最小限の員数であり、一行は三十五名を下らないと言うに留めておきたい。以下で名前が確認できた人物について、身内、御附の女性、御供の男性の三点から検討しておこう。

充真院の身内としては、孫娘の光が旅に同行していた[1]。光はかつて延岡で生活していたが、江戸を見聞したり行儀作法を習得するために、万延元年（一八六〇）十月十一日に延岡を発ち、十二月二十八日に江戸に到着し、以後、充真院に養育されていた[2]。文久三年（一八六三）に充真院が延岡に転居するに伴い、光も一緒に延岡に戻ることとなった。「夫に孫娘も、此二とせ計、日向より呼のほせ、また江戸の所々も見せ、行義を初おしへんと思ひしかひもなく」とある[3]。光が江戸に滞在した期間は二年三ヶ月であったが、充真院は本当はもっと長い期間、光を江戸で養育したかったのである。光は江戸に滞在していた当時、充真院の居所である六本木の下屋敷に同居していたようである[4]。

光はこの旅の当時、稚児輪を結っており、元服前の少女である。四月十一日の記述に光が駕籠の中で居眠りをしたため、「ちこわも損しちらし髪」と、稚児輪に結っていた髪が乱れてしまったとある[5]。

「五十三次ねむりの合の手」には、祖母として孫娘に躾けをしている充真院の一面を知る事ができる貴重な場面が記録されている。それは旅の初日である四月六日に、宿泊地である程ケ谷（武蔵国）での出来事である[6]。「お光、髪指を落しさかしくれよとやかましく、そこ爰さかし出しか、又こゝに置しか無とてやかましく云故」と、光が自分の髪に挿していた簪を無くしたことに気付き、探して欲しいと騒ぎ出したのであちこちを探したが、さらにここに置いていたのに無くなったと喧しくしたという。それに対して充真院は、「一本なしとて、道中之事故、其様にいわぬ物と外のをさしてよといひ」と、簪を一本無くしても、旅先なので喧しく言い立ててはいけない事と、他に持参した簪を指しておくようにと、光をたしなめている。「落たらは落し候儘にして、何事もかんへんして、口やかましくいわぬ物といゝふくめ、人のめいわくに成事はいわて」と、落とした場合は、そのまま黙っておき何事も我慢をして、口やかましく言わないこと、さらに人の迷惑、すなわち御附の者たちの手間をかけることは言ってはならないとも諭している。高貴な立場にある者として、自分たちの世話に携わる周囲の者たちに対する配慮の大切さを教えたのである。

尤も充真院は光を諭しながらも、祖母ならではの孫娘に対する甘

さも垣間見え、「名古屋へ行は沢山に整上るといゝて」と、名古屋に到着したら簪を沢山買ってあげるとも述べている。未だわきまえが十分ではなく子供っぽさのある光と、躾を心がけながらも、つい孫娘を甘やかす言葉をかけてしまう充真院の様子は、いつの世にもある孫と祖母との関係が垣間見え、微笑ましい。

光の振る舞いに対して、祖母である充真院はあれこれと目配りをして心を砕いている。四月十一日には、光が駕籠の中で眠りこんでしまい、髪が乱れ、正体無い様子であることに気付き、起こそうとしているが、その様子を駕籠の周囲の人たちに見せたくないと、気をもんでいる。[7]

また、大坂屋敷に滞在中の四月二十八日に、大坂見物をする為に乗船した際、光の腰帯が火入れに入り、辺りが焦げ臭くなるというハプニングがおきる。光は子供ゆえ、注意が行き渡らずうっかり火入れの上に座ってしまったのである。一時は船中が騒ぎとなったであろうし、悪くすれば光が火傷を負う危険もあるのだが、それでも充真院は「末はわらひと成りて」となかなか大らかである。[8]充真院は、思いがけぬ事態が発生しても、終わり良ければ全て良しというばかりに、泰然とした心持ちである。

次に、御附の者たちを見てみよう。一行のうち、名前が記載されているのは充真院の身近で世話をする奥付の女性たちと、旅を担当する役人である藩士たちである。

奥付の女性として名前が確認できるのは、砂野、長尾（長を）、せい（せゐ）、秀、とき、もと、まき、初つ、幾田、むつ、花、雪、みき、歌など十四名である。[9]それぞれの苗字は「五十三次ねむりの合の手」に記載されていない。[10]

そのうち、砂野は奥付の女性の中で最高位の老女であると思われる。[11]その理由は、女性たちの名前を連記する際に、必ず冒頭に砂野の名前が掲げられていることをはじめ、[12]砂野に関する記載が最も多く見られることや、充真院が体調不良のため拝観先の部屋をかりて休息した時に、最小限の人数が付き添った際にも身近におり、常に充真院に付き従っているからである。[13]それに加えて、砂野の出身地である播磨国赤穂郡の坂越で、砂野は実家の人達に会いに行く事を許されたように、[14]格段の扱いをうけているからである。なお、砂野は赤穂藩森家（当時の藩主は忠典、外様、二万石）の家中出身である。

長尾は砂野の次席である中老であろう。その理由は女性たちの名前を連記する際、砂野の次に長尾の名が見られることや、[15]大坂屋敷で出立に出入りの町人である鹿嶋家の主人と手代が挨拶に来た際に砂野と共に挨拶を受けていること、[16]砂野と船中の詰所が一緒であることによる。[17]そして、記名順と頻度から、せいと秀がそれに続く立場の御側であると思われる。ちなみに、せいは朗らかな性格の人物のようで、踊りの手つきを真似て見せたりしている。[18]

むつは三味線が上手だったようで、充真院に所望されて三味線を弾いている。[19]充真院は十代の頃から琴を弾いており、[20]長年音楽に親

しんでいた。その充真院に認められる程の腕前を、むつは持っていたのであろう。

花と雪は女性たちの中でも特に若く、おそらく行儀見習いとして奉公していた家中の少女なのではなかろうか。雲泊（豊後国）の湊に到着した折に、海岸に遊びに行き地元の人から奇妙な生き物を貰っており（七章に後述）、無邪気な様子が窺がわれる。[21] 推測の域を出ないが、御末だったのではなかろうか。

この二名は一向と離れた行動をとった事がある。それは、充真院よりも一日先に、泊りがけで金刀比羅参りを済ませた件である。五月十五日に充真院が金刀比羅宮に行く途中で休憩を取った折に、前日の参詣から戻ってきた花と雪に遭った様子が、「茶抔のみいこひし内、きのふ花・雪抔は泊りかけに参詣に行て帰りしに逢」と記してある。[22] 明記していないものの、二名は充真院が参拝をするに先立ち、代参を命じられたと推測できる。

歌も御末と思われる。充真院一行が四月二十四日に淀川で食らわんか舟からまずい餡餅を購入した一件（八章に後述）を、居眠りをしていた為に全く知らず、充真院たちから悪戯半分にまずい餅を食べるよう勧められた様子が、笑い話として次のようにしたためられている。

「おいしきあん餅有ゆへたへよとおこしければ、有難とて直に一くしたへ終て、風味いかゝと尋しかは、至極おいしといふは、またねむけさめぬ故と皆々笑ひ、めさめし哉、何を皆笑ふといへる」。[23]

寝ていた歌を起しておいしい餡餅を食べるよう勧めると、寝ぼけている歌はありがたく餡餅を一串食べた。味はどうかと尋ねると、歌が大変美味しいと返答したので、まだ寝ぼけていると皆が笑ったのである。歌は目覚めてから、何を笑っているかと、さらに尋ねたという。歌のとぼけた様子が愉快であると共に、主従共に時には子供の様な心持ちで戯れあっている。和気藹々とした一行の雰囲気が垣間見られる。

さて、藩士の随行者について見てみよう。「五十三次ねむりの合の手」に具体的に通称が記されているのは市右衛門、義兵衛、泰三郎、尚格、茂兵衛、貞之丞、録太郎、仲之介、四郎兵衛ら九名である。[24] いずれも「五十三次ねむりの合の手」には、苗字の記載がなく通称のみ記してあるが、義兵衛は斉藤儀兵衛知恒、泰三郎は佐久間泰三郎恭明、尚格は喜多尚格秀堯、茂兵衛は松井茂兵衛一元、貞之丞は石井錠次郎（貞之允）治良、録太郎は石井錠次郎（貞之允）治良の息子、仲之介は茂野又八郎（後、仲之介）賢抄であることが藩士の由緒書類から確認できる（詳細は後述）。しかしながら、市右衛門と四郎兵衛は現在のところ由緒書類に相当する人物が見出せず、苗字が不明である。

右のうち、義兵衛、泰三郎、貞之丞は、文久三年当時は既に隠居していた藩士と推測できる。その理由は、文久三年当時の履歴を含む「下士以上由緒書」[25] に彼らの記録がないが、それ以前の時期に活躍した藩士の履歴をまとめた由緒書類には充真院の近くに仕えた記

事が確認できるからである。由緒書類に記載してある履歴は、原則として戸主であり現役の藩士として活躍した当時の事柄である。「五十三次ねむりの合の手」に同行者として通称が見られるが「下士以上由緒書」に記載が確認できない者とは、家督を次代に譲り隠居した者であり、現役を退いてはいるが、長年内藤家の奥向の任務を果たし、充真院と懇意な藩士と判断できるのである。三人のうち、義兵衛と貞之丞は充真院と同世代と推測できる程、高齢である（詳細は後述）。

さらに「五十三次ねむりの合の手」に記載された以外にも、この旅に同行した藩士がいることが、「下士以上由緒書」から確認できる。掲載順（いろは順）に示すと、池田恒卿時寿、中村貞中貞、佐藤太七郎嘉猷、山辺次右衛門卿善、松崎久造保年、松崎左五郎都則、斉藤牛太郎智高、三森直一郎貞幹、鈴木栄久勝、鈴木安之助など十名である。[26] これらのうち、佐藤と松崎左五郎都則は、充真院らが六本木屋敷を出発した当時は延岡におり、大坂屋敷に一行を迎えに行き、その後延岡までお供をした。なお、斉藤牛太郎智高は前述した斉藤儀兵衛知恒の息子で、鈴木栄久勝と鈴木安之助は父子である。

右の十名のうち旅の御供をした当時の職名[27]が判明する者をあげておこう。池田が御側医見習い、山辺は充真院と光の御用達、松崎久造保年は道中取調掛合と出立の賄役方、斉藤牛太郎智高は充真院の重役、三森は道中御用達と駕籠脇、鈴木栄久勝は道中御船中御納戸役、鈴木安之助は道中御船中御用達を勤めた。[28]

さて、「五十三次ねむりの合の手」に通称が記された者について、ここに各自の行動を抽出してそれぞれの立場や充真院との関わりを検討してみよう。

まず、市右衛門から見てみよう。市右衛門は一行の男性の中で、充真院との会話が最も多く確認できる。しかも市右衛門は、一行の行動を決定する立場にもあり、発言権を有しこの旅において重要な位置を担う人物と思われる。それにもかかわらず、藩士の由緒書類から市右衛門に該当する人物を、現在見出すことができない。実は天保十年（一八三九）の光明寺参拝の旅の随行員にも、内藤家の由緒書類に記載が見られない人物が一名おり、それは御里附重役であった。[29] これは充真院の実家である井伊家から内藤家に派遣されて、充真院に仕えた井伊家家中である。後述するように、旅の途中で井伊家の荷物の通行に出会った際に、市右衛門が井伊家の様子を聞きにいった事からも、市右衛門は御里附重役の可能性がある。

市右衛門が一行において、リーダー的な存在であったことを窺がわせる会話から見てみよう。それはいよいよ延岡に上陸する六月二日の朝に、市右衛門が充真院と交わした会話である。[30] 波が高いので、充真院が市右衛門に「此やうすはいかゝ、浪音も立候て、空合もよろしからす」と尋ねたところ、市右衛門が「大遍の様子、此方迄は気つかひは無と思へと、雨にならんうちに少しも御早き方に御上りよく」[31]と返答しており、市右衛門の言う通り、早く上陸することに決まった。そこで、急いで食事を済ませるよう皆に促すために、市

右衛門と充真院とでそれぞれ表方と女性らにその旨を伝えようと、充真院が市右衛門に申し付けている。その充真院の言葉は、「いそき御せんをたへ、表方は市右衛門之方にてせつけよ、女之方は私せかさん」と述べたことが記載されている。市右衛門は表方、すなわち男性たちの纏め役としての存在なのである。

しかも、市右衛門は、充真院のごく身近に付き従っている。五月十五日に金刀比羅宮を見物した折に、充真院の具合が悪くなり、金刀比羅宮の配慮により本坊の奥で休憩した部屋にも、市右衛門は同行しているのである。[32]その時、充真院がその部屋から見える景色について、市右衛門に讃岐富士かと聞き、市右衛門がそうである旨を返答している。さらに、五月二十九日に嶋之浦から土地の役人が充真院一行の到着を祝う和歌を添えた献上品を届けに来た際に、その気持ちに感動した充真院に対して、市右衛門は返歌をするよう提案している。[33]

市右衛門は、充真院の実家である井伊家への使者も勤めた。四月十二日に倉沢で充真院の一行が休憩していた時に、彦根藩の荷物の通行が通過するので、そこに市右衛門が出向き井伊家の様子を聞いて戻り、充真院に伝えている。[34]一連の市右衛門の勤めやその行動は、一行の中での地位の高さ、及び充真院から信頼が格別に厚いからこそといえよう。その一方で、五月七日に兵庫の湊に到着した折、市右衛門は上陸して小魚を調達するなど、雑用もこなしている。[35]

義兵衛――斉藤儀兵衛知恒――は充真院の身近におり、かつ親しく会話をしている点が注目できる。斉藤儀兵衛知恒は文政四年（一八二一）四月六日に奥重役を任命され、以来奥向の勤務に従事した藩士である。天保三年（一八三二）十月十九日に井伊家から当時の充姫の御附を数年にわたり滞りなく勤めた功により、褒美を授与された。天保三年八月には息子の牛太郎も御側勤めとなり、以来、親子で藩主家に仕えた。義兵衛は天保十年四月の光明寺参拝の旅では御用達を勤め、同十一年（一八四〇）九月十一日に充真院の御用掛を命じられた。[36]したがって、義兵衛は奥重役に任命された文政四年以来、四十二年間も充真院をはじめとする藩主一家と身近な藩士の一人であった。息子の牛太郎の履歴が弘化元年（一八四四）十二月から正式に記されているので、遅くともこの頃に義兵衛から牛太郎に家督を譲ったのであろう。充真院にとって、斉藤親子は二代にわたり信頼できる藩士だったのである。なお、義兵衛の奉職年から推測すると、この旅の当時、少なくとも六十歳以上の高齢で充真院と年齢が近い。上下関係が厳格な当時とはいえ、同世代であることも親しい会話が成立する一因となったといえよう。

義兵衛が充真院と交わした会話が「五十三次ねむりの合の手」に残されている。五月十五日の金刀比羅宮参拝の折、義兵衛は本船で留守番をしており、参拝を終えて戻ってきた充真院と言葉を交わした様子が次の通りである。「本舟に帰れは、義兵衛留守して、けふは風も有涼しくて宜敷御参詣と申ぬ、此方は暑くて気分悪くよふ〳〵の事にて行と申」とある。[37]すなわち充真院が本船に戻ると、義

兵衛が「今日は風があり涼しかったので、気持ちよく参拝ができたことでしょう」と充真院に声をかけたところ、充真院は「金刀比羅宮は暑くて気分が悪くなり、やっとのことで参拝した」と返答している。このように両者の間には、非常に身近な存在としての会話が成立している。義兵衛は充真院が二十二歳の頃から奥重役となり、以来四十二年も顔見知りであるので、右に示したような自然な会話が成立するのであろう。

義兵衛は充真院がとる行動についても直接意見を述べている。六月二日に小船に乗りかえて延岡城の近くに上陸する際に、雨中の船着場から石段を登る時に充真院を駕籠に乗せようという意見があったことに対して、義兵衛は「先あるかれ候はゝ、あるくかよからん、直に又駕籠よりおりねは、高き石段は上られす」と駕籠に乗るよりも歩くことを勧めており、充真院はその意見に従っている。[38]

義兵衛は使者の役目も果している。四月十日に箱根の関所を通過するに先立ち、義兵衛は使者として一行よりも一足先に関所に向かっている。義兵衛は幕府側の関所役人に対応する重要な任務を担った。[39]さらに、義兵衛は延岡上陸前に舟奉行が一行の舟に挨拶に来た時の対応について知識と経験があり、充真院の質問に返答している。その様子は、「舟奉行初に逢との事、いかゝ致候事哉と尋候所、義兵衛昔はこうせし、あゝせしと云」とある。[40]長年内藤家に仕え、先例に関する知識が豊かな義兵衛だからこそであろう。

なお、義兵衛は、船中で六月一日と二日に側医の尚格（詳細は後述）と共に充真院の側に、砂野らと控えている様子が伺える。[41]義兵衛と尚格は共に長年藩主の家族に仕え、充真院と近しく、さらに高齢でもあるので特別な待遇なのである。

泰三郎――佐久間泰三郎恭明――は嘉永五年（一八五二）九月二十六日から藩主夫人の御用達を勤め、安政元年（一八五四）三月十八日から充真院の御用達となり、同年四月十日から御用達本役を務めている。[42]旅の当時は家督を譲り隠居していたようである。

泰三郎はその後、明治五年（一八七二）一月に充真院が江戸に転居する為に延岡を出発する先立ち、同四年（一八七一）十二月二十日に開かれた告別の宴に参加したり、同五年一月十一日に充真院にお目見えして形見の品を贈られた人物の一人である。さらに同十三日には出発準備の手伝いに参加するなど、別れを惜しんでいる様子が確認できる。[43]充真院に仕えた年代から察して、前述した義兵衛や後述する尚格よりは年下で、中年ぐらいと思われる。

泰三郎も充真院と近しい藩士である。しかも、この旅では充真院が駕籠で移動する際に、駕籠の脇に従い、充真院の様子を気遣っている。四月十一日に三嶋明神に参詣した後、充真院が駕籠の中で居眠りをして、後頭部を駕籠にぶつけている[44]音を聞き、布団の様なものを被ると良いと勧めたのが泰三郎である。これについては「泰三郎、駕籠わきにて聞とふか、ふとんやうなるかふり候様にと気を付くれ候」とある。[45]なお、一行が六本木屋敷を発ち高輪で休憩する折、泰三郎の弟が菓子を持参して挨拶に出向いている。[46]

尚格――喜多（木田）尚格秀堯――は側医である。尚格は充真院が全幅の信頼を寄せていた人物とみなしてよかろう。その履歴を振り返ってみると[47]、充真院の亡き夫である政順が藩主であった天保元年（一八三〇）年七月二十一日に御側医見習となり、同四年（一八三三）七月一日から御側医本勤めに昇進した。同八年（一八三七）九月七日に当時の藩主政義の病中に治療に尽力した功績で褒美を授与された。その後、同十年に充真院が菩提寺である鎌倉の光明寺に参拝した旅にも同行している[48]。さらに、弘化二年（一八四五）二月一日から充真院の御附となり、嘉永元年（一八四八）九月二日には奥様（藩主正義夫人）御附も兼帯、同年十月六日と同四年七月十八日に御出生様御附を兼帯、文久元年（一八六一）二月十一日には御姫様御附も兼帯した。すなわち、充真院とその家族に極めて長年にわたり身近に仕えていたのである。御側医見習の年から換算すると、尚格は充真院が三十一歳の頃から仕えており、文久三年当時は三十三年来の知己である。極めて磐石な信頼関係を築いていたといえよう。さらに尚格は慶応元年（一八六五）三月に充真院と光が江戸に転居する際にも同行し、その後、明治五年に充真院が再び江戸に転居する際にも、江戸に戻るわずか十名の中に尚格が入っている[49]。

「五十三次ねむりの合の手」に尚格について名前が明記してある記事は、旅に出発した四月六日と到着する六月一日と二日のみである。しかし、長い旅の期間に側医という立場から、高齢である充真院の体調に常に対応して薬を処方したのは、まさしくこの人物である[50]。

四月六日に高輪で休憩する際に、充真院が駕籠から降りようとしたものの御附の女性たちの駕籠が遅れてその場に不在だった時、代わりに尚格が充真院を案内している[51]。この事実からも、尚格は御附の女性の役目を代行できる程、充真院の身近にいることが確認できる。

尚格は充真院から信頼を寄せられており、六月一日に波が荒く船酔いに罹った充真院は薬を飲み、しかも、周りに人が少なく心細い時に、義兵衛と尚格が頼りであると述べている[52]。したがって、充真院の周囲が最小の人数の場合にも、尚格は義兵衛と共に付き従っていたことが確認できる。

同様の様子が二日にも見られる。延岡に上陸する際に乗り移った小船に充真院と光、砂野、長尾、せゐ、秀、歌などの女性と、義兵衛、尚格が共に乗船している[53]。この例からも、長年にわたる身近な奉公により、充真院から極めて信頼が厚い存在で、破格の待遇を受けていた様子が窺がわれる。

茂兵衛――松井茂兵衛一元――は、文久三年正月十一日から御側かつ充真院と光らの御用掛兼中奥御用掛を勤めた[54]。五月十七日と十八日に、海の様子を見て停泊に関する指示を出した事が記されている[55]。

貞之丞――石井錠次郎（貞之允）治良――は、この旅の当時、充真院の御附御納戸役を勤めていた[56]。天保九年（一八三八）に十二月

十三日に充真院の御用達、同十年には御用達本勤となり、同十年四月の光明寺参拝にも同行した。嘉永五年十二月二十六日に井伊家から充真院の御附として長年勤めた功績として褒美を授与された。安政元年（一八五四）七月二十日には充真院の御附御納戸役に任命された。奉職年から推測すると、文久三年当時は五十歳代ではなかろうか。

五月二十九日に失敗談が紹介されている。[57] この日は波が荒く舟がたいへん揺れていた。充真院が船の二階から一階へ降りて来た時、「何よき匂ひしなから、いふりくさく、何と見し所、貞之丞少しゆれ直りて、お茶を入てのまんと思しかは、こしらへは致なから忘れて火はちにかけ置しか、あまり久しく成、湯皆にへ付て、土ひんの底ぬけ、茶焼て居しまゝ」と、何かよい匂いであるけれども燻り臭く、何かと見たところ、貞之丞が船酔いが少し直ったようでお茶を入れて飲もうと準備していたのだが、土瓶を火鉢に掛けておいたことを忘れて、長くそのまま放置していた為、湯は全て煮えてしまい、土瓶の底が抜け落ちてお茶の葉が焼けてしまった様子を発見したのである。

これについて充真院は、「何ともなきとはいへど、やはりこはくて忘し物と笑、やう〳〵生かへりし心地して」と、貞之丞は船が大揺れしても平気な様子で強がっていたが、本当は怖かったので、土瓶を火鉢に掛けていたことを忘れたのにちがいないと笑い、この一件により、自分自身はようやく生きた心地を取り戻したと述べている。

一歩間違えれば、船中で火災が発生する危険な状態であるが、そのような同行者の落度を、充真院はからかい笑うことにすりかえてかばっているのである。充真院のおおらかさであり、同時に気配りでもある。部下たちに対する優しさの表れともいえよう。

録太郎――石井録太郎――は石井錠次郎（貞之允）治良の息子であり、この旅では道中御船中御用達を勤めた。[58] 録太郎は、他の領主から挨拶の使者が来た折に、充真院一行の使者として挨拶に応じる役を勤めている。豊後国の下内（下苗）で当地の領主である臼杵藩稲葉氏（藩主は久通、外様、五万石）の使者が船を漕いできた折に、内藤家側として大伝馬船を出して対応したのが録太郎である。[59]

仲之介――茂野又八賢抄、後、仲之介――は、五月十七日に六嶋で一行の船を海賊船と勘違いした地元民が大騒ぎした折、佐久間泰三郎と共に先行して上陸した。[60] この旅における職務やその他の行動については不明であるが、御番勤が長く他に御徒目付に任ぜられた前歴から推測すると、騒然とした六嶋上陸時に佐久間の護衛をしたものと思われる。なお、弘化二年七月八日に六本木屋敷の作事方、安政二年（一八五五）六月二十五日に六本木屋敷の御徒目付に任じられた。旅の当時は家督を次代に譲り、年齢は少なくとも五十歳代半ば以降だったものと思われる。[61]

なお、四郎兵衛に関しては現在のところ手がかりが少ないので、後日検討したい。

ところで、充真院は随行員たちにとって、主人として如何なる人物だったのだろうか。前述した一連の事例から、充真院は随行員たちに対して、あたたかな細やかな心遣いを欠かさない主人であると思われる。その様子を窺がえる記述を一つ追加しておこう。旅の初日・四月六日に、武蔵国の神奈川台で小休憩した時の事である。小休憩をした時分、雨がたいへん激しく降っていた。充真院と御附の女性らは休憩所に上がり、藩士の直井次郎右衛門[62]が差し入れた亀の子煎餅を食べる程度の短時間の休憩をとった。短い休憩時間に「砂野抔は向の気色初て見、めつらしかりて遠目かね取寄悦て見」と、砂野が遠眼鏡で雨中に霞む向かいの景色を遠眼鏡を覗いて悦ぶ姿を、充真院は微笑ましげに描写している[63]。

その一方で、男性らは土足のまま外に待機していた。ほんの短時間の休憩であり、手狭であったらしく致し方ないのだが、充真院は男性らを気の毒でたまらなかった様子で、「男子之者は少しも上へは上りかね候とて、土そくにて休居を見れは気の毒、早々立て行」と、早々に休憩を切り上げて出発する。このように、充真院は部下たちに対しても気配りのあるあたたかな心を持った主人だったのである。

（1）本来、充真院と光とは叔母と姪の間柄である。充真院の実弟である井伊直恭が、充真院の夫であった藩主政順が死去した後に内藤家の養子に入り、政義と改名して次代藩主となった。それに伴い、充真院は二十歳年下の政義の養母となる。養子である政義の子供が光なので、充真院にとって光は孫娘ということになるのである。

（2）光が延岡を出発して江戸に到着した年次については、光の出府に同行した藩士の一人である鈴木栄久勝の履歴に具体的に記されている。典拠は、明治大学博物館所蔵内藤家文書の「下士以上由緒書」（架号、第一部・三〇由緒分限・五）一一巻である。

（3）明大翻刻本、七頁。

（4）『内藤家文書増補・追加目録　9　延岡藩主夫人　内藤充真院繁子著作集一』（明治大学博物館編、平成十七年）に収載されている「色々見聞したることを笑ひに書」の八七頁に、光が夏の夕方、六本木屋敷から程近い西之久保にある熊野神社の祭礼を見に出かけ、充真院は光がいないため「淋しき」と思う様子がしたためられており、充真院と光が同居していたことは間違いない。右の記録には具体的な年代を明記していないものの、光が江戸に滞在した年でかつ健康であった年となると、文久元年・二年（一八六二）・慶応元年（一八六五）・同二年（一八六六）のことと限定される。なお、充真院に慈しまれていた光であるが、慶応三年（一八六七）八月に病気のため早世してしまった。明治大学博物館所蔵内藤家文書の中に、慶応三年八月十八日の年記を持つ「御姫様御病気御差重被遊候付伺御機嫌之御帳」（架号、第一部・四家・五〇七）があり、光が病気に罹ったことがわかり、さらに同所蔵同文書の慶応三年八月の「光姫様御遠行一件」（架号、第一部・四家・五〇八）から死去が確認できる。

（5）明大翻刻本、一九頁。

（6）右同書、九頁。以下に続く光が簪を無くした一件の引用も同頁である。なお、伊能秀明氏の「幕末東海道おんな道中記『五十三次ねむりの合の手』――日向延岡藩主夫人内藤充真院旅日記の可笑しさについて――」（『明治大学博物館研究報告』第十号、平成十七年）の二七～八頁でこの件が紹介されている。伊能氏はこの際の充真院の口ぶりに注目して「周囲への心づかいや孫への情愛が感じられ印象的である」と評している。なお、以下の本稿で伊能氏の論文についてふれる時、伊能論文と略記する。

（7）明大翻刻本、一九頁。

（8）右同書、三九頁。

（9）それぞれが旅日記のどの箇所に記載されているか、明大翻刻本の頁で示しておこう。砂野は八、九、一五、四七、五四、五六、六〇、六四、七七、八二、八四頁である。長尾は一五、二三、五四、五六、八四頁、せいは一五、七〇、七七、八四頁、秀は一二、一五、七七、八四頁、ときは一五頁、もとは一五、七七頁、まきは二三頁、初つは四七、五四頁、幾田は六〇頁、むつは六〇、七五頁、花と雪は六一頁、七六頁、みきは七七頁、歌は八四頁である。

（10）文久三年に充真院附として共に旅をした女性のうち、苗字が推測できる者が若干いる。それは、せい、もと、歌であり、渡辺せゐ、曽根もと、斉藤歌ではないかと思われる。その根拠は「午ノとし十二月より東京行日記」である。この旅日記は明治五年（一八七一）一月に充真院が四度目の旅として延岡から東京に移動した際の記録である。出発前の十二月二十三日に充真院は馴染みである大参事の妻や女性たちを呼び集めて別れを惜しんだ。その時集まった人名の一覧に、右に示した三名の姓名がある（明大翻刻本、二二一頁）。最も文久三年から八年後の事なので、特に最も若いと思われる御末の歌は嫁ぎ先の苗字という可能性が高い。女性の苗字について明記した公的史料が乏しい現在、推測に留めざるを得ないが、一つの可能性として示しておきたい。

（11）ところで、この旅に随行した内藤家の奥向の女性らの職名やその構成については「五十三次ねむりの合の手」には明記していない。時期や充真院の立場の変化（藩主夫人、未亡人）により、奥向の構成も変化した可能性もある。充真院の奥向の構成について、参考として以下に二例を示しておこう。文化十一年（一八一四）は、老女一名、中老一人、御側四人、御小姓一・二名、御次二人、御台司二人、御中居二人、御末三人という構成である（明治大学博物館所蔵内藤家文書「政順様御婚礼御双方問合書付留帳」架号第一部・四家・七四による）。天保十年（一八三九）に菩提寺である鎌倉の光明寺に参拝した際の女性の随行員は、老女一人、中老一人、御側三人、御次一人、御中居一人、御末二人であった（同家文書「充真院様鎌倉御廟参調」架号第一部・四家・四一一による。なお、天保十年の事例は拙稿「鎌倉旅行」四一頁、四九頁で明らかにした）。

（12）明大翻刻本、一五、五四、七七、八四頁。

（13）右同書、六四頁。

（14）右同書、六〇頁。なお、砂野が実家の人達と再会するにあたり、城下には足を踏み入れず、船着場から一里程の場所で落ち合い再会を果たした。

（15）右同書、一五、五四、八四頁。

（16）右同書、五四頁。

（17）右同書、五六頁。

（18）右同書、七一頁。

（19）右同書、七五頁。

（20）充真院は十代から琴に親しんでおり、流派は八橋流である。これについては「政順様御婚礼御双方問合書付留帳」に、井伊家からの返答として記載されている。なお、この返答によると、充真院は井伊家の姫であった当時は三味線を嗜んでいない。

（21）明大翻刻本、七六頁。

（22）右同書、六一頁。

（23）右同書、三七頁。

（24）これらの人物について、「五十三次ねむりの合の手」に記載された頻度が高い順に、明大翻刻本の当該頁を示しておこう。市右衛門が二二、五七、六四、八〇、八三、八四頁、義兵衛は一八、六七、八二、八四（四行目と十四行目の二箇所）、八五頁、尚格は八、八二、八四頁、茂兵衛は三六、六九、七〇頁、泰三郎は一九、六八頁、仲之介は六八頁、録太郎は七四頁、貞之丞は七九頁、四郎兵衛は三六頁、である。

（25）明治大学博物館所蔵内藤家文書「下士以上由緒書」（架号、第一部・三〇由緒分限・五）。

(26) 随行した藩士について「下士以上由緒書」に収載された巻数を示しておこう。池田恒卿時寿は一巻、中村貞中貞と佐藤太七郎嘉猷は五巻、山辺次右衛門卿善と松井茂兵衛一元、松崎久造保年、松崎左五郎都則は七巻、斉藤牛太郎智高は九巻、三森直一郎貞幹は十巻、鈴木栄久勝と鈴木安之助は十一巻である。三森直一郎貞幹は、父である三森保次繁栄の履歴の箇所にこの旅における任務が記載されている。お供ではないが一行が旅を無事に進める為に大切な役目を担った藩士として藁科勘十郎武篤についてふれておこう。藁科はこの旅における道中御宿割に任命され、一行よりも一日早い四月五日に先行して宿泊の交渉を行い、五月二十一日には江戸に帰郷した。藁科については、「下士以上由緒書」の四巻に履歴が掲載されている。なお、石井と喜多は江戸に居た家族も延岡に移動した。

(27) 延岡の旅は当初は延岡永住の為の旅であり、旅の期間も長いので、かつて天保十年に鎌倉の光明寺参拝として七泊八日の旅をした時よりも随行員が多いはずであるが、未だ全ての職名が把握しきれていない。したがって、鎌倉旅行の際の役職を一つの目安として示しておきたい。天保十年の光明寺参拝にお供をした男性の職名は、拙稿「鎌倉旅行」の四一頁に示した。そのうち充真院と比較的近い立場にある上位の者は、御用人一名、御里附重役一名、御納戸役一名、御側医二名、御用達三名、御勘定人頭役一名、頭右筆一名などである。

(28) 同行者の当時の役職や充真院への功績について「下士以上由緒書」から補足しておこう。池田は文久三年四月一日に御側医見習いに任命された。山辺は文久二年（一八六二）閏八月九日に充真院と姫の御用達となる。松崎久造保年は文久三年三月十七日に延岡への旅の道中取調掛合に任命された。斉藤は万延二年（一八六一）正月十一日に充真院の重役に任命され、文久三年四月三日に井伊家から充真院に長年貞実に勤め、かつ延岡への旅の準備に尽力した功により褒美を授与された。三森は文久三年四月一日に道中御用達と駕籠脇を命じられた。鈴木栄久勝は延岡で光に仕え、万延元年八月十三日に姫様御附兼帯となり、同年十月十一日に光が江戸に出府する際に同行し、以後江戸に留まり仕えた。文久三年四月一日に道中御船中御納戸役に任命され、六月一日の延岡の川口御入船の時には御納戸役を勤めた。さらに、右のうち延岡に到着後、道中の尽力により褒美を授与された者がいる。同年八月四日に山辺と鈴木父子、同月五日に池田と松崎久造保年、九月十九日に三森などである。

(29) 鎌倉旅行の随行員で由緒書類に記載がないのは御里附重役の平居安太夫である。平居については、拙稿「鎌倉旅行」の四一～二頁でふれた。

(30) 明大翻刻本、八三頁。

(31) 右同書、八四頁。以下、六月二日の市右衛門に関する引用は同頁である。

(32) 右同書、六四頁。

(33) 右同書、八〇頁。

(34) 右同書、二二頁。

(35) 右同書、五七頁。

(36) 「新由緒書」（明治大学所蔵内藤家文書、架号、第一部・三〇由緒分限・三）一〇巻、「下士以上由緒書」九巻。

(37) 右同書、六七頁。

(38) 右同書、八五頁。

(39) 右同書、一八頁。

(40) 右同書、八四頁。

(41) 六月一日については右同書、八二頁、同二日は八四頁。

(42) 「由緒書」（明治大学所蔵内藤家文書、架号、第一部・三〇由緒分限・四）六巻、「下士以上由緒書」九巻。

(43) 明治五年一月に充真院が江戸に転居する旅に出た件は、「午之とし十二月より東京行日記」に詳しい。この旅日記は充真院が執筆した最後の旅日記で、「五十三次ねむりの合の手」と同じく明大翻刻本に収載されている。泰三郎が別れの宴に参加したのは右同書の二二〇頁、充真院から形見の品を贈られた件は二二八頁、出発準備の手伝いに赴いた様子は二三五頁である。

（44）充真院が頭を駕籠にぶつけていることは、伊能論文の二九～三〇頁に指摘がある。
（45）明大翻刻本、一九頁。
（46）右同書、八頁に「泰三郎弟も参り、菓子を到来し」とある。
（47）喜多尚格については、「新由緒書」一一巻と「由緒書」六巻、「下士以上由緒書」一〇巻に記載がある。本稿にまとめた喜多の履歴の典拠は、天保年間の記載は右の三点にあり、弘化・嘉永年間については「由緒書」と「下士以上由緒書」、文久・慶応については「下士以上由緒書」にのみ記載がある。
（48）拙稿「鎌倉旅行」の四二～三頁。
（49）明治五年に充真院が江戸に転居する際、尚格も同行した件は、「午ノ年十二月より東京行日記」にある。当該部分は明大翻刻本の二二〇頁である。
（50）延岡に到着後、旅における尚格の貢献に対して八月三日に金二百疋が授与された（「下士以上由緒書」一〇巻）。
（51）明大翻刻本、八頁に「尚格(楽)安し」とある。
（52）右同書、八二頁。
（53）右同書、八四頁。
（54）松井茂兵衛一元については、「下士以上由緒書」の七巻に記述がある。
（55）明大翻刻本、六九、七〇頁。
（56）石井錠次郎治良については「新由緒書」一巻、「下士以上由緒書」一巻。
（57）明大翻刻本、七九頁。
（58）この旅における録太郎の任務は「下士以上由緒書」一巻の父石井錠次郎（貞之允）治良の箇所に合わせて記載してある。
（59）右同書、七四頁。
（60）右同書、六八頁。
（61）茂野又八賢抄の履歴は「由緒書」六巻。
（62）明大翻刻本、九頁。直井次郎右衛門とは、直井次郎右衛門（勝弥）武旨の後裔と思われる。直井次郎右衛門（勝弥）武旨は、文政十一年（一八一四）六月九日に「奥様御納戸役」に任命されて以来、奥向きの勤めを歴任し、天保十二年（一八四一）閏正月十四日に充真院の重役となるが、その後、安政元年正月十二日に病没している（「由緒書」三巻、「下士以上由緒書」六巻）。
（63）明大翻刻本、九頁。以下の引用も同頁である。

六　心身の状態

六十四歳の充真院にとって、二ヶ月近い長期間の旅は心身共にたいへん負担があったと想像できる。住み慣れた江戸屋敷での平穏な日常とは異なり、旅先ならではの不便さや、長期にわたる連日の移動で疲労が蓄積されるはずである。道中での充真院の心身の状態について明らかにしてみよう。

五十五日間の旅のうち、体調の不調をうかがわせる記事は十三日分で、四月十一日、十二日、十四日、十七日、二十八日、五月三日、六日、十五日、十六日、二十七日、二十八日、二十九日、六月一日である。充真院が六十四歳という高齢であったことや、日頃は江戸屋敷の隠居として静かに生活していたこと、充真院の人生における初めての長期に及ぶ旅であること、しかも駕籠や船による移動は疲労を伴うことなどを考えると、江戸を出発してから延岡に到着するまで長期間のうち、心身の不調が十三日分であったのは、むしろ健康に過ごせた日々の方が多いといえる。充真院は年齢にしては体力

があったといえよう。

旅の期間である旧暦の四月上旬から六月初頭は、さわやかな初夏から蒸し暑い陽気へと移る時期で、その間に梅雨の到来も含んでいるが、寒さに向かう秋や冬と比べると旅をするには絶好の季節である。内藤家が慌しいながらも旅をこの時期に設定したのは、高齢である充真院の体にかかる負担を最小限とするように気遣ったからではなかろうか。

まず、精神面から見てみよう。既に従来から指摘されているように出発時においては江戸を離れることが辛くてたまらず、悲壮感さえ漂わせていたが、次第に前向きな心地となり、見聞を楽しむようになった[1]。具体的には四月六日から同十日の午前中までは、精神的にたいへん落ち込んでいたが、同日の昼頃からは明るさを取り戻している。旅の第五日目からは精神面は回復に向かっていた。

出発日の四月六日は、江戸に二度と戻れないであろうと思い、江戸に残る人々と名残を惜しんだ。六本木屋敷を出る時には、「只々涙に目もふたかり」と、涙にくれていた[2]。

途中まで見送りにきた者たちとも、「皆一生のわかれとて涙さしくむ計」と、今生の別れと思い、皆と涙を流して別れを惜しんだ。この旅について「いかにうき世の事とても、かわりはてたる旅と思ひつゝけて」と、憂き世であると言っても、江戸から離れて地方に下らなければならないほど、運命が変わり果ててしまった旅であるとまで述べている。悲しい心地の旅は、出発日である四月六日の天候が雨であったことにより、心が一層ふさがれている。「雨中之事、物事淋しく、うつら〳〵として」と、雨降りの為、ますます寂しい気持ちであったと記載している[3]。

このような悲しい気持ちは、四月十日の午前中に小田原から箱根の山中の江戸が見える最終地点まで続いた。これについては、「もはや此山きり、江戸の方は見へすと聞は、少し駕籠を留て見おろし、帰らん事は出来ぬなから、何となくかなしうて、袖ぬらしつゝ、山中にて初てほとゝきすを聞く[4]」と、この山が江戸が見える最後の場所であると聞き、少しの間、駕籠から降りて江戸の方を眺め、江戸に戻ることはできないので何となく悲しくなり、涙にくれて袖で涙をぬぐっている。涙を流しながら今年初めて耳にした不如帰の鳴き声は、充真院の心にしみいり悲しみをを弥増している。しかし、この江戸が望める最終地点でおおいに涙を流してからは、きっぱりと諦めもついたようである。その後、温泉のある宿で休憩したいと希望を御附の者に伝えたところ、それが叶うこととなり「嬉しくて」と喜びの気持ちを表している[5]。

この喜びの記載は、前述の涙にくれた記事の次の件として続いており、いずれも十日の午前中の出来事で時間としてもさほど離れていない。涙をたくさん流すことにより、心が落ち着き諦めがついたこと、さらには長年の念願であった温泉を訪れる希望が思いがけず叶い、温泉宿を見聞するという新しい目的が生じた為、気持ちをきっぱりと切り替えることができたのである。気持ちの切り替えの速さ

から、充真院はさっぱりとした性格であるといえよう。

尤も予定外の温泉宿での休憩が実現したのは、少し前に充真院が江戸が見える最後の地点で涙を流して悲しんでいる様子を見た御附の者たちが、充真院を少しでも元気づけたく思い了解したという一面もあるのではなかろうか。

身体的な不調としては、眠気、気分の悪さ、船酔い、疲労、視力、気管支の支障などが確認できる。そのうち、眠気・船酔いは駕籠や船の揺れが原因であり、気分の悪さは暑さや揺れにより、道中特有の不調である。気管支の支障は軽い風邪らしく一時的である。一方、日頃からの身体的不調は視力の衰えである。これらの不調は単独に生じることもあれば、複数である場合もある。身体の不調の様子を、陸路での不調、海路での不調、最大の不調、一過性の不調、日頃からの不調の五点から見てゆこう。

まず、陸路での不調である。これは駕籠に揺られたことが原因と思われる眠気と気分の悪さ、疲労などである。駕籠の中でぼんやりと眠っている様子は、旅の初日である四月六日の品川を過ぎて、鈴ケ森や大森辺りで早くも確認できる。六十四歳という年齢で疲れ易い事に加えて、出発の準備などで疲れが溜まっていたこと、江戸及び江戸で親しんだ人々との別れの悲しみから精神が不安定な状態が続き、疲労が増していたのであろう。[6]

旅の六日目である四月十一日は、朝の出発直後から、既に駕籠の中で居眠りが始まっている。この時は「我は気分悪く、うつら〳〵として、あたりのことも思へす」と、気分が悪かった為に居眠りをしていたと明かしている。[7]前日の十日は深い悲しみと大きな悦びを短時間に味わっていた。前述したように、江戸が見える最終地点でおおいに涙を流してから程なく、長年の念願であった温泉宿に行くことが叶いうれしく思い、気分の上昇・下降が極めて激しかった。さらに温泉宿での見聞が珍しく、「五十三次ねむりの合の手」に紙数を割いて書き綴り、しかも挿絵を豊富に描いていたことから、充真院が深く興味・関心を覚え、好奇心をおおいに刺激されたこと、うれしさのあまり心中が一種の興奮状態にあったものと思われる。気分の激しい低下と高揚を短時間に体験した為、意識せずとも神経が疲労したことが、翌日の朝からの疲労に繋がったのではなかろうか。

十一日は三嶋明神を参拝した後に、より疲れたようで激しく睡魔に襲われている。その様子は「我は駕籠にのりて、たへすいねふりしては、うしろの方へとん〳〵とあてるゆへあふなく」と、駕籠の中で常に居眠りをしており、体が揺らぐ度に後頭部をとんとんと音が響く程、駕籠にぶつけており危ないと記している。[8]しかも充真院が後頭部を駕籠にぶつけている音が、駕籠の横に従っている泰三郎に聞こえる程であり、心配した泰三郎は充真院に布団の様な物を被るよう声をかけた。

実際に、後頭部を何度も強くぶつけており「うしろのつむり、余程はれ、いたみこまり」と、後頭部が腫れて痛み困った程であった。

そこで充真院は手ぬぐいを被ろうと思うと返答した。しかし「我にてもあてましとは思ひつれと、つい〳〵あてる也」と、後頭部をぶつけないように気をつけようとしても、それでも繰り返しぶつけており、余程、睡魔が募っていた模様である。[9] 尤も、十一日は充真院のみならず、御附の女性たちも初めての長旅ゆえ、ここ数日の疲れが極度に達していたようである。「初ての旅、前よりのつかれにて、髪指を落し候者抔も多く有」と、女性らの多くが簪を落として紛失したという。

この日、沼津の松原にさしかかったあたりで、充真院は「とにかく気分悪く」と不調を感じる。山越をしたあたりで、充真院は駕籠から出て少し歩くように勧められたが、歩く気持ちになれなかった程、大儀であった。御附の者が充真院に歩くことを勧めた点に注目したい。この場合の気分の悪さとは、充真院の身体そのものが原因ではなく、駕籠の中の狭い空間にじっと座ったまま揺られ続けた為に生じた気分の悪さなのである。駕籠での移動は、現在で言うところのエコノミー症候群のような症状を起こしかねない状態なのである。

翌十二日は、前夜から宿泊していた原の本陣を発って少したった頃、「気分少しは宜敷成し」[10]と、前日からの不調が回復したものの、午後に休憩をした家で、「夫に気分悪く、うつ〳〵と致居」と、再び気分が悪くなった。[11]

四月十三日には駕籠から見る街道沿いの景色がおもしろくないので、「例之いねふり」をしている。[12] しかも、居眠りを続けたのは、駕籠の廻りに付き従っている従者たちが誰も喋らず静かなので、「猶々ねる計」と居眠りをしたという。居眠りは自然と睡魔に襲われた場合以外にも、このように意識して眠ることにした場合もある。

陸路で充真院の疲れがピークに達したのは旅の十二日目の四月十七日である。岡崎の宿で夕食後に「草臥しまゝ、そこ〳〵にして休」と早々と就寝した。[13]

駕籠の中で眠気が生じて居眠りをするのは、駕籠で揺られることに加えて、退屈も一因であるようだ。それは五月六日に大坂屋敷を発ち、船で海路を進んでいる際の記述から窺がわれる。「夕かけて蛙の声しぬるを舟中にて聞くもめつらしく、道中とはちかひねむくもなくて」とあるように、夕方に船中で蛙の声を聞くという珍しい体験をしたり、いよいよ瀬戸内海を渡り延岡へ向かう本格的な船旅が始まり、これまでの陸路とは異なる様子に興味が生じた為、眠気がおきないのである。[14]

海路特有の体調不調は船酔いである。まず、五月二十七日に豊後国の雲伯を発ち、海路を進んだ時のことである。半日も激しい揺れが続いた為に、「とても気分も悪く」なったという。[15] この日、充真院は気分の悪さゆえ、良い湊があれば休みたいと伝えたので、大嶋（大島・豊後国）の鮪浦（しびうら）に停泊した。

船酔いに苦しんだのは五月二十九日も同様である。蒲江を出港して嶋之浦に向かう海路でのことである。進む毎に波が荒れて船中で

転倒するほどであり、いくらか凌ぎやすい御座船の二階に「薬を持て今日も上り、やう〳〵とこらへ居りしかと」と、船酔い留めの薬携えて二階でかろうじて我慢したという。「今日も」というので、その前に船酔いをした二十七日にも薬を持って二階で過ごしたのであろう。[16] 尤も二十七日は船の揺れがとても激しく、多く随行者が船酔いに苦しんだ。充真院の御附の女性らのうち五人も船酔いとなり、交代しながら二階で休んだという。

その後、六月一日も「皆は昨日より、又よひ候人多」とあり、前日よりも船酔いする者が増えた。充真院は「私は薬をたへて、やう〳〵としのき」と、船酔いの薬を飲んでかろうじて耐えたのである。[17]

次に、最悪の体調不調についてである。それは五月十五日に金刀比羅宮（讃岐国）を参詣に訪れた時である。この時は薬を服用する程であり、繰り返す気分の悪さを克明に記している。気分が悪くなった様子は「かこにゆられし故か、暑に障りしゆへか、気分悪くとうきして、薬抔用ひつゝ行」から始まる。気分が悪く動悸が生じた原因は、暑さ故か駕籠に揺られたためであろうと充真院は推測している。[18]

いずれにしても、この折、充真院は暑さと駕籠の揺れを辛く感じていた。尤も、この時の不調はごく一時的であったようだ。その理由はこれに続く記載に、早苗が青々と広がる様子を目にして「詠よく」と、すがすがしい風景を見て短歌を詠むのに良いとしたためているうえ、向かいに当日の参拝目的地である金刀比羅宮が鎮座する象頭山が見えると報告を聞きうれしく感じており、詠歌や進行状況に心を寄せる余裕が生じているからである。

しかし、金刀比羅宮への坂を上る途中で、また「用意に薬・水抔持しをのみ」[19]と用心のために薬を服用したが、休みながらゆっくりと登ったものの石段の坂を登るにつけて「気分悪くとうきしけれと」と、この日二度目となる気分の悪さに加えて動悸に悩まされる。青銅の鳥居の辺りでは「生もたへなんと思ひ、死ひやうくるしく成」と、死んでしまうかと思うほど苦しかった。そして、もしも死ぬのならば本殿の前までたどり着いてから死にたいと思うに至るほど、体が辛く限界を感じている。気を張って歩を進め、本殿の脇に到達した時には「めもくらみ、少しいきつきて」というように、眩暈がしたり坂を上って息が切れて呼吸が激しくなったという。

肉体の疲労と苦痛に耐えて石段を登りきったものの、「目悪く、御内神（陣）は、いとくろうして、よくも拝しかねしおり」と、目が悪いため、さらには内陣がたいへん暗いため、よく見えずに拝みきれないでいたところ、「やう〳〵少し心落付しかは、薄く見へ」と、段々、心を落ち着かせたところ、内陣が薄く見えたという。目が薄暗さに慣れたため見えるようになったものの、ぼんやりとしか見えなかったのである。[20]

御附の者たちは、「私気分悪きにて、御守戴事も忘て、気をもみ居計との事」と、充真院の体調の悪さを心配したあまり、金刀比羅宮でお守りを戴くことを忘れてしまった。石段を御付の者に助けら

れながら降りた所に観世音堂があり、参拝を勧められたが、「気分悪く、上るもめんとう」なので外から拝んだ。気分の悪さは傍から見ていても気の毒な程であり、「余りくるしそうに見へし故、本坊へ立寄休よと、僧の来りていひしまゝしたかひて行し所」と、金刀比羅宮の僧侶から本坊で休憩するように勧められ、厚意をうけて暫く休憩した。

その後、夕暮れ時に金刀比羅宮を退出し、往路で立寄った茶屋の椛屋で再び休憩した際に、気分が悪くなった原因について充真院は思いをめぐらしている。気分が悪くなった原因は「けふの暑さと、かこにゆられしと色々にて、気分も悪く成しならん」と、暑さと駕籠に揺られた為と自ら指摘している[21]。そして、「いつもあつさきらひには候へとも、此様成事は初て、ふしき成ると思ひ」と、元々暑さは嫌いではあるが、今日のように気分が悪くなったのは初めてであると不思議に思っている。

この日の不調は充真院のこれまでの人生の中でも、未だかってない体調の不調だったのである。不調の度合いを振り返り「今日は死ひやう思ひしに」と表現している。そして、今日は気分が悪かったので、夜から船出するのは見合わせてほしいと、充真院は申し出たという。幸い、翌日・十六日には「気分も元にかへり」とあり、気分の悪さは一日で去ったのである。

一過性の体調不良は、気管支の不調と貧血があげられる。気管支の不調は四月十四日の記事に、ごく簡単にしたためられている。充真院は「此節、せき出る故」と咳が出ていた。そこで、小夜の中山の夜泣き飴を購入して駕籠に入れてゆくことにした[22]。ここ数日、軽い風邪をひいたのであろう。

貧血は陽気が原因である。五月三日に大坂で道沿いの店の端午の節句飾りを見物した後のことである。旧暦の五月三日は湿度も高く蒸し暑さがつのる頃である。「暑さにて、めくらみたる様なれは、鳥渡やすみ」と、暑さにより目がまわったので少し休息した。尤もこの記述に続き「茶にてものみ行はやと思ひ」とあるので、一過性の貧血と思われる[23]。

日頃からの不調は視力の低下である。充真院は当時、恒常的に視力の衰えに悩まされていた。目に関する記述が最初に現れるのは四月六日である。旅の第一日目に高輪まで見送りに来てくれた人たちと共に休憩した宿で、隣の部屋で女郎が化粧する様子を珍しく思い観察しようとしているが、「例の悪き目ゆへ、能も見へす」とあり、日頃から視力に支障があったという。尤もこの日は雨が降っており、室内がやや薄暗かったこともさらに影響していよう[24]。

視力の支障について、まず遠くが見えにくい様子を指摘しておこう。四月十一日は天気が良く、原の宿に七つ（午後四時）頃に到着した時に、富士山がよく見えると言われたが、「眼気悪きゆへか、少しも見へす」と、充真院は全く富士山が見えず残念であったという[25]。

翌日・十二日の午前中に御附の者が富士山が薄く見えると知らせ

てくれたが、「中々見へす」と、前日と同様に充真院には見えなかった。[26] 名残に富士山を見たいと思っていたが、結局見ることができなかった。その後街道沿いで美しい田畑の風景を見たが、「見へぬ目のおしく思ひ〳〵て」とある。近くの景色は美しさを識別できるぐらい見えるけれども、鮮明には見えない様子である。

快晴の明るい光の下であっても、ごく近くの物が見えにくい様子が、前述した五月三日に確認できる。端午の節句目前であるため、道沿いに連なる店に幟や人形が飾られており、珍しく思い見物したが、「眼気にてよくはめとゝかね、残念に思」と、鮮明には見えなかったのである。残念であると心情を簡潔に表明している。[27]

比較的至近距離であっても、動いている対象の模様などは判別しにくかった様である。四月二十三日に石山寺に向かう途中で、反対方向からすれ違う人々が良い着物を着ていると御付の者たちが言うものの、充真院の眼には「例之眼故、よくもめとめす」と、いつもながらの視力ゆえ、詳細には見えなかった。[28]

高低さの判別も難しかったようである。大坂屋敷に滞在中、四月二十八日に四天王寺を参拝した際、当時、廻廊の中に建っていた織殿の二階に上りたかったが、「兼の目故、上りおりむつかしく」と、充真院の視力の状態では階段の段差を見極めるのが困難であるため断念している。[29]

夕暮れ時はもちろん見えにくかった。五月二十八日に蒲江（豊後国）の磯辺で人々が何か拾っているので、充真院も拾いたいと思ったが、「夕くれゆへろく〳〵貝・石もみえねは」と、夕暮れとはいえ他の人たちは判別できるので拾っているのだが、充真院の眼では磯に落ちている物が識別できなかった。[30]

尤も、充真院は自らの視力について「並」であると意識している。四月二十八日の大坂見物の帰路に夜店を眺めた折に、「人こみにてろく〳〵見分かたく、めもなみにて、ゆる〳〵と見候はゝ」と、通りに人が多くて見分けにくく、かつ自身の目も「並」であるので、ゆっくり眺めたという。[31]

「五十三次ねむりの合の手」には見えなかったという記述が散見していた。見えない事に関する度重なる記載は、充真院の残念な思いの吐露である。しかしながら、充真院は視力の衰えを年齢相応と認識していたからこそ、並という表現をしているのである。むしろ視力に難があっても、仕方ない時は諦めるが、別の機会には積極的に眺めたり、観察を試みるところが、好奇心旺盛な充真院らしさといえよう。

さらに、「五十三次ねむりの合の手」を執筆するに際して、本当に自らの目で確認した事象と、見えなかったので御附の者から聞いて知った事柄とを、明確に書き分けようという充真院のいわば実証的な姿勢が、見えたか否かを殊更に記録することになったと思われる。

（1）　出立時の悲しさや辛さについては、柴桂子『近世おんな旅日記』

〈歴史文化ライブラリー13〉（吉川弘文館、平成七年）の八九頁、伊能論文の二四～五頁で指摘されている。なお、以下で当著作についてふれる際に、柴前掲書と略記する。

（2）明大翻刻本、八頁。以下に続く引用も同頁である。
（3）右同書、九頁。
（4）右同書、一三頁。
（5）右同書、一三頁。
（6）右同書、九頁。
（7）右同書、一九頁。
（8）右同書、一九頁。以下に続く引用も同頁である。
（9）右同書、二〇頁。以下に続く引用も同頁である。
（10）右同書、二〇頁。
（11）右同書、二二頁。
（12）右同書、二三頁。以下に続く引用も同頁である。
（13）右同書、二七頁。
（14）右同書、五六頁。
（15）右同書、七六頁。以下に続く引用も同頁である。
（16）右同書、七七頁。
（17）右同書、八二頁。
（18）右同書、六二頁。以下に続く引用も同頁である。なお、この日に充真院の駕籠を担いだのは、専門の駕籠かきではなく舟子である。舟子は駕籠を担いだ経験が無いが、駕籠を落とさないように大切に担げは良いと、駕籠舁きの方法を知っている小使が教えながら進んだという。未経験者が担ぐ駕籠ゆえ、普段よりも駕籠が揺れて乗り心地が悪かったと思われる。この点も充真院の体調に支障をきたす要因となったのではなかろうか。
（19）右同書、六三頁。以下に続く引用も同頁である。
（20）右同書、六四頁。以下に続く引用も同頁である。
（21）右同書、六七頁。以下に続く引用も同頁である。
（22）右同書、二四頁。
（23）右同書、四九頁。
（24）右同書、八頁。
（25）右同書、二〇頁。
（26）右同書、二一頁。以下に続く引用も同頁である。
（27）右同書、四九頁。
（28）右同書、三二頁。
（29）右同書、四四頁。
（30）右同書、七六頁。
（31）右同書、四八頁。

七　庶民との出会い

道中で各地の庶民たちとささやかながらも出会いの機会を得たことは、充真院にとって新鮮な体験であったと思われる。庶民とその生活は、興味深い見聞・観察の対象である。しかも、若干ながら言葉を交わす機会もあった。庶民との遭遇・交流について、詳しい記述があるのは十八日分で、四月八日、十二日、十七日、十九日、二十三日、二十八日、五月三日、四日、五日、九日、十一日、十五日、十七日、二十日、二十二日、二十六日、二十七日、二十九日などである。

身分制社会であるゆえ、充真院一行は旅先で出会った庶民から敬われるのが常である。例えば、四月二十三日に、宿泊予定である伏見の丹波屋から出迎えの者が、わざわざ途中まで出向き平伏して一

行を迎えたうえ、さらに裃を着た迎えの者も到来するなど丁寧な対応を受けている。[1] 四月二十八日に大坂のふく屋を後にする際には、店の女房らしい女性ときちんと身繕いをした女性たちが、充真院一行を玄関まで見送り、丁寧にお辞儀をして送り出している。[2]

人々から礼儀正しい振舞を受ける様子は参詣地でも同様で、四月二十三日にふく屋から四天王寺参拝を経て向かった住吉大社でも確認できる。住吉大社の門前で遅れた者たちを待っている時に、住吉大社の神主がやってきて充真院が乗っている駕籠に礼をしてから、男性の御附の者に挨拶をしている。[3]

五月十五日に金刀比羅宮で体調不調となり休憩した折にも、「其内寺よりも使者来り、参詣の悦いふて、金玉糖もらひ候」と、金刀比羅宮の使者が充真院らの所に金玉糖を持参して挨拶をしている。[4]

尤も長旅のことゆえ、稀に不愉快な思いも感じたが、庶民との出会いは充真院にとって興味深い体験であり、その様子を「五十三次ねむりの合の手」に多々書き留めている。それらを、この旅における初めての庶民とのふれあい、子供との出会い、茶屋や宿での出会い、大坂屋敷出入りの町人、各地の人々との出会いなど、五点に絞って見てみよう。

この旅で、初めて庶民と身近に接する機会が生じたのは、旅の三日目の四月八日である。場所は平塚（相模国）の海岸である。平塚には前日・七日に到着して宿泊し、八日の午前中に本陣を発ち海岸を訪れた。充真院が浜辺で駕籠から降りて歩く予定であったことが、「浜へ出る比は、駕籠よりおりんと思ひ、いそけるまゝ着たるひふのまゝに行」という記事からうかがわれる。[5] 日頃、江戸屋敷で生活している充真院にとって、浜辺を自らの足で歩くこと自体が新鮮な体験であり、楽しみだったのであろう。

平塚の浜辺で充真院は地引網漁を見物する。浜辺のあちこちを眺めていると、「今地引網すとて、漁士（師）とも出て来て舟こしえへす」と、地元の漁師らによる地引網漁が始まった。

平塚の海岸は砂浜であり、漁船は砂浜に引き揚げてある。充真院一向は船が砂浜から海へと引き出されて、漁師らが大勢乗り組む様子から見物した。浜には地元の子供たちが無邪気に遊んでおり、「子供らは幾たりも砂浜にころ〳〵と寝て遊居を見」と、充真院が子供たちをあたたかなまなざしで眺めていた様子が窺われる表現である。

充真院が地引網を見物するに際して、御附の者が近所から敷物を借りてきた。「きたなきこさを持て来りしゆへ、夫に居てたはこ抔のみて網引を見」と、近隣の庶民の家から借りた莫蓙が汚いが、それに座り煙草を吸いながら見物した。地引網は充真院一向の心をおおいに掴んだ。「末にはつほねの者、小使抔も手伝、つな引もおかしく」と、御附の女性や小使が飛び入りで参加して、漁師らと一緒に地引網を引いて楽しみ、充真院はその様子を微笑ましく眺めたのである。

充真院は浜辺にいる子供たちに菓子を与えた。庶民の子供たちに

とって、菓子は見ることも口にすることも極めて稀であり、珍しい品である。「其うち子供に菓子遣しければ、段々多く成しまゝ」と、菓子を目当てに、次第に集まってくる子供の数が増えた。

充真院は網の側に行き網をよく観察した。その時に耳にした地元の漁師の言葉は分かりにくかった。「何かわや〳〵わからぬ事云て」とあり、地元の方言、および庶民の話し振りが、充真院には理解できなかったのである。漁師の頭らしい人物は、充真院に獲れた魚を見せ、説明までしてくれた。それにも関わらず、充真院は不快な気持ちを感じた。漁師の頭は「今日之風にて今之網には魚いらす、少しとれ候魚みする」と、今回の地引網は魚が少ししか獲れなかったが、その魚を見せると申し出たのだが、充真院はその様子を「むくつけくて、いひさまも知らす」と、無骨であり言葉遣いもなっていない人物であると、不快感を容赦なく書き付けている。

充真院は漁師の頭から親切な行為をうけているのだが、庶民が直接、武家階級でありしかも女性である自分に声をかけたことを不躾と感じたようである。加えて、洗練されていない方言による庶民の言葉遣いが、充真院には粗野に聞こえて不快だったのである。

とはいえこの後、漁師の頭は充真院に魚の名前を説明し、充真院も見知らぬ魚に興味を示し、その名前を質問している。縞鯛（充真院は「嶋たい」と表記）にいたっては挿絵まで描く程、気に入ったようである。充真院は一瞬とはいえ漁師の頭に不快感を感じたものの、知的好奇心が勝り会話を交わしたのである。しかも、漁師の頭は一行に獲れた魚を分けてくれ、人柄はとても親切であった。

次に子供との出会いについてふれておこう。充真院は旅先で子供に出会うと、先の平塚での様に菓子を与えることが常であり、同様の記載が各地で度々確認できる。四月八日の平塚の他に、同十二日の倉沢（駿河国）を過ぎた付近や、同十七日の蔵法寺前の休憩地と岡崎（三河国）などである。さらに五月九日には明石湊で充真院らが乗船している舟を、小船に乗り側まで見に来た娘や子供に菓子を与えた事例や、五月二十九日の延岡での事例などがある[6]。ここでは十二日の倉沢と十七日の岡崎の蔵法寺前での様子を紹介しておこう。

四月十二日に倉沢を通り過ぎた辺りの海辺の家で休憩した際に、やんちゃな子供たちに出会う。充真院が休憩した部屋は中二階の様な造りであり、そこから見える庭で子供たちが遊んでいた。その様子は次の通りである。「庭に子供の遊ひ居しまゝ、少々くわしをまき遣しければ、次第に多く成て、まけ〳〵と云ゆへ、うるさく成しまま障子締切と、足場迄登る、こまり物といひつゝ、此所立出行[7]」。中二階の様な部屋から下の庭にいる子供に菓子を撒いて与えたところ、子供たちが次第に大勢集まりしきりにやかましくねだった。充真院らが閉口して障子を閉めると、子供たちは充真院らが居る部屋の足場にまでよじ登ってきたので、ますます困りつつ、その家をあとにしたという。充真院は子供好きなのである。それ故に、子供を見かけると菓子を与えるのだが、あまりにも行儀の悪いやんちゃな子供たちに、とうとう閉口したのである。

一方、四月十七日にかわいらしい子供たちに出会う。まず、赤坂で昼食を摂り、蔵法寺前で小休憩をした宿での出来事である。宿の幼い子供も正装して、充真院一行を礼儀正しく出迎えた。この子供は「此宿に五ツ計成子供、上下を着、向ひに出て、床にはれいし、石に付きたるか」とあるように、五歳ぐらいの裃を着用した男の子である。[8] 男の子は頭が床の石に付く程、丁寧な御辞儀をして充真院らを出迎えた。充真院はこの男の子をかわいらしく思い、「宿のかわゆらしき故、側へよひて、くわし抔遣し」と、自分の側に男の子を呼び寄せて菓子を与えた。

十七日は岡崎の本陣・中根甚太郎に宿泊し、この宿の幼女と出会う。充真院は幼女にたいへん懐かれたのである。この幼女について、充真院は次のように詳しく記録している。「此家の娘、八ツ計にて、茶・菓子抔はこひ持来りて、側に居故、其やうすを見れは、けしほうつにして、うしろの髪を長くのはし、其さきをかた過る迄、着物は袖ちいさく、帯はかたひきとして、たらりと下け居」。[9] 幼女の年齢は八歳ぐらいで、充真院に茶・菓子を運んできた。幼女はそのまま側に控えていたので、充真院は幼女の髪型や服装を観察している。髪型を芥子坊主にして、後ろの髪を長く肩先過ぎるまで垂らしていることや、着物の袖が小さいこと、帯を片引きにして下げており、これは岡崎の子供たち特有の装いであるという。幼女が右の装いで茶を運んできた様子を、充真院は「五十三次ねむりの合の手」に挿絵として描いている。

幼女は充真院にたいへん好意を寄せた。「かの娘は私之側はなれす、めった成事もなしかたくて、次へ遣はさはやと思へと、直に来りこまり」と、幼女は充真院の側から離れようとせず、他へ行かせてもたちどころに充真院の側に戻ってきてしまい困ったという。[10] 充真院が幼女にかけた言葉は記載されていないが、優しい言葉や態度で接したからこそ慕われたのであろう。離れようとしない幼女に困惑したと感想を記しているものの、充真院は幼女に「手遊ひ遣す」と玩具を与えた。自分に懐いた幼女を愛おしく思ったからこその行為であり、幼女とのひとときは微笑ましい良き思い出となったのである。[11] その後も各地で子供たちと出会い、充真院が子供に菓子を与える機会が度々あるが、玩具を与えた例は稀である。[12] 充真院にとって幼女との出会いは格別のものだったのである。

次に、宿や茶屋の人々との交流について見てみよう。宿や茶屋の人々は職業柄、貴人に接する機会があり、対応や接待に慣れた庶民である。したがって節度をもちながら歌舞音曲を介して充真院らを楽しませた様子がみられる。ここでは桑名（伊勢国）と大坂を事例としてあげておこう。

桑名に宿泊した四月十九日に、宿の女房と三味線を介したふれあいが見られる。充真院一行が宿に到着してから、夕食前にお酒を飲み三味線を御附の者に弾かせてくつろいでいた時の事である。この宿の女房はたいへん三味線が好きであり、充真院一行が三味線を弾いて楽しんでいる音色を耳にして、是非、自分も聞かせて欲しいと

申し出た。申し出は快諾され、女房は充真院らがいる隣の部屋――おそらく襖を開け放った隣室――で三味線を聞いて楽しんだのである。この様子は「三味せん出させひかせ候へは、宿やの女房、殊之外すきゆへ聞せくれよと次之間に参り」と記載されている[13]。

さらに女房は、「悪くとも宜敷かは、琴御座候まゝあわせ物聞度との事とて、琴持参り、三ッ計皆か引申候」と、粗末な品だが琴があるので、琴と三味線の演奏を聞かせて欲しいと申し出た。充真院らはその申し出を受けて、女房から琴を借りて三味線との演奏を三曲ほど皆で弾いた。身分の差異があるため女房は隣の部屋に控えてではあるが、充真院らと共に音楽を楽しんだのである。

さて、大坂の場合である。四月二十八日に大坂の四天王寺を見物をした後に、昼休みを茶屋のふく屋でとった際に、この店の赤前垂れ――接客女――らと愉快なひとときを過ごす。充真院らの隣室から酒盛りをしている客を三味線と歌で接客している赤前垂れのにぎやかな様子が聞こえてきた。赤前垂れは良い声で「なの葉」を歌い、「おもしろくさはき、大しゃれ咄し」と、愉快に大騒ぎしていた[14]。充真院は赤前垂れの存在を以前から知っていたが、実際に見るのは初めてで珍しく思ったようだ。「幾人も居は美しく見へ」と充真院は赤前垂れの姿を美しいと評している。

赤前垂れが充真院たちの隣の部屋に来たので、「今うたひしのはとの人」と美しい声の主を尋ねたところ、「中にけんきらしき女、わしやといふ」とあるように、赤前垂れの中の元気の良い女性が名乗り出た。「わしや」という庶民ならではの返事や威勢のいい振る舞いも、充真院には面白く珍しく聞こえたことであろう。そこで、「何そおもしろ事みせよ」と面白い事を見せるよう申し付けたところ、赤前垂れは大坂の拳を座して実演した。充真院らは大坂の拳が気にいり、拳に踊りがあるのなら立って実演せよと、さらに申し付けたところ、赤前垂れたちは立ち踊りを付けて拳を見せた。その節が大坂なまりなので、充真院たちには一層可笑しかったのである。

充真院たちは、「皆様もおみやけにとて、江戸けんをおしへて、是を大坂へはやらせてといゝて」と、赤前垂れたちに江戸の拳を教えて、それを大坂に流行らせよと言い、その上、「おとりてみせければ」と踊って見せる。赤前垂れたちは、「おほへる気に成て、いく度とうたへとも、きつねとはいわれすして、けつねに成り、人々わらひ、とふしても〳〵きつねとはいわすおかしく」と、江戸の拳を覚えようと繰り返し歌ったものの、「きつね」と発音すべきところを、「けつね」と発声してしまい、それが可笑しくて充真院らは笑ったと言う。赤前垂れたちは当地の言葉の発音の傾向で、どうしても「きつね」とは発音できなかったのである。そのうち充真院も「段々するうちに、きつねやけつねやとちらか自分にもわからす」と繰り返しているうちに、自分の発音も混乱してきたという。赤前垂れたちとのひとときは、充真院らを大いに楽しませた上、ささやかながらも階級や地域を越えた一種の文化交流となった[15]。

この日は再度、茶屋で店の者たちと交流がある。住吉大社から帰

宅する途中に立ち寄った茶屋で夕食のお酒と食事を摂っていた折、充真院が通された隣の部屋で食事をしていた砂野と初の所に、茶屋の女房と娘が来て会話をした。その様子は「次の間にて砂野・初（ママ）つせん抔たへし所、茶や女房・娘など出て、いろ〳〵なる咄し致させ、大坂のことはめつらしく聞」とある。[16]

どのような話をしたのか具体的に記しておらず残念である。とはいえ、双方の会話が和やかに円滑に進んだからであろう、急ではあるが充真院は茶屋の間取りを見物する事となった。充真院は間取りに関心を寄せているので、[17]夕刻で他の客がいなかったのを好機とみなして、希望を茶屋の者に伝えて実現したようである。

さて、内藤家出入りの町人と充真院一行との関わりを簡単に示しておこう。

五月五日に大坂屋敷に出入りしている内藤家の銀主二軒の店主と手代が充真院に別れの挨拶に出た。銀主の一軒は鹿嶋屋であり、「鹿嶋より義太夫本、船中のなくさみにもと沢山にもらひ」と、長い船旅の無聊に備えて義太夫本を沢山贈呈された。[18]充真院は義太夫節に関心があり、大坂滞在中の四月二十七日に屋敷に呼んで演じさせたが、江戸よりも旨くないと評している。[19]出入の鹿嶋屋は充真院が義太夫節に関心を寄せている事を知り、沢山贈呈したのであろう。

その他の町人からも菓子折を贈られている。内藤家と大坂の出入りの町人らとの円満な間柄が窺がわれる。さらに萬屋という町人は、舟着き場まで見送りに来ており、「萬や抔はこゝよりいとま乞してかへり申候」とある。[20]充真院一行が大坂に滞在した期間は短く、充真院にとって初めての滞在であったが、大坂屋敷出入りの町人たちは、これから長旅を続ける充真院らに心配りを寄せ、礼を尽くしたのである。

大坂以外の各地にも出入の町人がおり、充真院一行に挨拶に来た様子が確認できる。それは、五月二十日の御手洗（安芸国）で、「出入之町人より酒・肴・草花、さゝに入て到来す」と、出入りの町人が酒・肴と草花を贈物として届けに来た。[21]旅先での贈答は、町人から一行に対する細やかな配慮が感じられる。特に、身体の疲れを取る酒・肴に加えて、草花を贈られたことは、舟での長旅をしている充真院や他の御附の女性たちにとって、美しい草花を目にして心を慰められたのではなかろうか。このような商人は、内藤家の藩主が参勤交代をする際に宿泊する定宿や船懸りでの用を担う、当家の馴染みの商人であろう。

さて、各地の人々との出遭いについて、三机（伊予国）、雲泊、延岡を事例としてふれておこう。三机に入港した五月二十二日に、その地の庄屋の家の風呂を使用させてもらう。「庄や之所へ入湯に行」[22]とごく簡単に記してあるが、庶民の家の風呂に入ることは充真院にとって、庶民の家に足を踏み入れる稀な体験である。充真院が乗船している関船には湯殿が設置してあるので、[23]通常、充真院は船の湯殿を利用している。船旅での疲れを癒すために、土地の庄屋に便宜を計ってもらったのであろう。さらに一行は、この庄屋に餅を

調製することを依頼し、餅を搗かせて切餅を沢山用意してもらった。この餅は、「早そくいろ〳〵にしてたうへぬ」と、充真院一行の空腹を満たした。

雲泊の湊で地元の人々に遭遇したのは五月二十六日である。この地の人々は振舞いがたいへん無遠慮で、充真院らが困る様子も見うけられるが、総じて見ると良好なコミュニケーションが確認できる。

困った点は、地元の人が小船で充真院らの舟の側にやってきたうえ、静止しても舟に上がりこんできた者までいた事である。「舟と〳〵つき合やうに所々より来て、舟の廻りをくる〳〵と乗めくり、窓も明かね、締切は暑く」[24]と、地元の人々が沢山の小船に乗り、充真院らの舟の周囲を廻りながら眺めるので、充真院は窓を開けられず暑さに閉口したのである。

その上、「末には台所見せよと舟へ上り、せいしても聞す、次の舟へはのこ〳〵と入込みて見候由」と、地元民が船の台所を見せてほしいと勝手に乗船して、止めようとしても言うことを聞かず、結局、内藤家の第二番目の船にのこのこと乗り込んだのである。庶民が大名家の船に乗り込むこと自体が失礼な行為であり、かつ止めても耳をかさず、非礼の極みであるが、力ずくで止めなかった内藤家側は随分と寛容である。地元民と極力、トラブルを起こさないのが大名家の旅における心得でもあるので、内藤家側が地元民の行為を我慢したのであろう。結局、このような地元民の気質を考慮して、「末にはいたし方なく、夜に入はさそと思ひて、本船の両方へ番船を一夜付置ぬ」と、夜間には充真院が乗船している船の両側に見張りの船を付けて監視した。

あつかましい感のある雲泊の民であるが、充真院一行の内、御附の者や舟手の者が、岸に遊びに出かけた折に、地元民から海産物を貰っている。充真院の御附の者としては御末と思われる花と雪である。「花・雪、岸に遊ひに行、もらひしとて、きめう成いかと小魚もらひ候」と、花と雪は地元民から不思議な形の烏賊のような生き物と小魚を貰った。舟手の者も岸に遊びに行き、「延岡いかうふつほと申物之由にてもらひ、さゝゐのなりにて足の様につの出て居、其実をとらせ初て見し物故、取置、とこふし少しもらひ候」と、栄螺の様な形で足のように角が出ている不思議な生き物と、床伏を少し貰った。

岸に遊びにいったのは、充真院一行の内、いずれも身分が低い者たちであり、出自が庶民である可能性も大きい。同等、もしくは近い身分である為、地元民たちと短時間とはいえ親しく言葉を交わし、土地の珍しい海産物を貰うに至ったのであろう。ささやかながら、ようやく雲泊の民と良好な交流が成立したのである。

しかも、翌日・二十七日に雲伯を出港すると、地元民が充真院一行に見事な鯛を献上しようと船で追いかけて来た。船で追って来た地元民は充真院一行に礼を示して身繕いを整えており、「羽織着し男に舟頭、女・子供二り計着」と、その舟には盛装した男性と船頭、女・子供が乗っていた。「此網とれ候まゝ上るとの事、見れは三尺

余も有鯛を五ツ計持参り上度よし」と、採れたての大きな見事な鯛を五匹も持ってきたのである。瀬戸内海は大きな鯛が獲れる事で有名である。

充真院一行は、「誠に見事成魚を多くもらひては気の毒、心さしゆへ、一尾もらわん」と、たいへんりっぱな魚を沢山貰うのは気の毒なので、地元民の気持ちをありがたく思い、一匹だけ貰おうとした。しかし地元民は「せひ上度、皆様へ上度」と、どうしても充真院一行に献上したいと繰り返し言うので、「又一尾もらひ、挨拶にもく録遣し、女子に細工もの遣し候へは、悦かへりぬ」と、鯛をもう一匹――都合二匹――貰い、そのお礼として男性には目録（貨幣の包み）、女性には細工物を与えたところ、地元民は喜びながら戻っていった。

雲伯の人々は無遠慮な行動も見られたが、一方では貴人に対して礼を尽くすわきまえのある振る舞いも見られたのである。そして、充真院一行に対してたいへん好意的で親切だったのである。

嶋之浦でも地元民から献上品を受け取っている。五月二十九日に嶋之浦の庄屋が料理方に献上したいと、品物を積んで一行の船にやってきた。問題なのはその品で「冬西瓜の半分と白うり一ツ」と、冬瓜が半分と白瓜が一つである。[25] この献上品に対して充真院は当初、「江戸にては半分のとうかくれし人は無ゆへ、おかしく思ぬ」と、江戸では冬瓜半分を人に贈ることは有り得ないので滑稽に思ったが、当地は青物が手に入りにくいことが判明してから、地元民の心ざしに感じ入ったのである。[26] 貧しい生活を余儀なくされている庶民であっても、自分たちにできる精一杯の好意を充真院らに行動として示そうとしているのである。庶民が善良な心で領主家である内藤家の人々に向きあっている様子が窺がわれる。

そして、前述（四章）したように、延岡の領民・家中たちは、初めて延岡に国入りする充真院一行を、礼儀正しく迎えたのである。充真院にとって、見知らぬ地である延岡は、如何なる地なのか不安だったはずである。しかし節度ある態度の人々に出迎えられた充真院の感想から察するに、延岡に良い印象を持ったことは想像に難くなかろう。

さらに、延岡では浦の居役人である大橋忠通が、延岡へ無事到着した事と長寿を祈願する賀歌を献上し、充真院はその心遣いをしおらしいと心をうたれている。村人からも次々に「小鯛三十・玉子百・ます干物五十・あやめ蛤・かつをふし二れん」と、海産物や卵などが献上品として届けられ、船中は「座向より次まて一はい台たらけにて、足のふみ場なく」と、足の踏み場も無くなる程であった。充真院は「とふかかた付、又、料理にして遣す物はよきせよ」と、御附の者たちにたくさんの献上品を片付けるよう、さらに料理する物はすぐに使いやすいようにせよと命じている。

村人たちの献上品はさらに続き、この浦で捕獲した魚類を畳一畳程の生簀に入れて、充真院らの舟まで持参した。この日はあまり大きな魚は獲れなかったが、小鰺・鯛・鰯などを生簀ごと見せ、好み

の魚を差し上げたいので、入れ物を出して欲しいとのことであった。船中ゆえ、金盥しかなくこれに入れたところ、舟が揺れたか魚が跳ねて海水が飛び散ったのであろう、「座敷にはねて、皆々の貌に水かゝりてはこまり候、わつとのき大笑致候」と、献上品の魚を囲み皆で大笑いした。

生簀の魚を持参したのは庄屋で、礼を正して裃を着用していた。充真院らに対して平伏し大汗をかいており、領主の家人を前にたいへん緊張した様子であった。緊張故か動きもぎこちなく、生簀の魚を「やう〳〵すくひ出し」たという。魚の種類は九種類あったという[27]。

庄屋の他にも村人が舟に乗り込み充真院らの舟の近くまで来ており、「舟五・六そうに男女一はい乗て、手をつき居もおかし」と、五・六隻の舟に男女が沢山乗り、充真院らに対して敬意を表し、舟床に手を付いてお辞儀をしており、その様子を充真院は感心して眺めている。

地元民らは充真院らに献上品を贈るだけでは、まだ物足りなく思い、「とれも致不申候へとも、地引にて魚取見せん」と、魚が獲れないかもしれないが、地引網漁を披露したいと申し出た。しかしながら充真院は、「あまり面白くもなく、平塚にても見しけれと、いつかふに魚とれす、初よりとれぬといへは、先やめん」と、あまり興味がわかず既に平塚で地引網漁を見たが、その折に魚がなかなか獲れなかった上、今回は初めから獲れないかもしれないと村人が言っているので、地引網漁の実演を見物することを辞退した。

このように、領民たちは充真院一行に対して、何か尽くしたいという気持ちで行動している。領民が領主家に対する気持ちは、かくもあたたかいのであった。領民たちがこのように尽くしたくなる程、領民と内藤家との関係が良好であり、領民にとり内藤家が敬愛の対象であったことの反映といえよう。当時、充真院は二代前の藩主政順の未亡人であり、先代藩主政義の養母（実際には異母姉）、当代藩主政擧の祖母という立場である。はるばる遠い江戸からやって来た高齢の充真院を慰めたいという、領民たちの優しい心が感じられる。

なお、この地の庄屋に一行が風呂を借りた。この晩は船懸りの予定であり、充真院は上陸するのが面倒で風呂を辞退したが、他の者たちは庄屋の風呂を借りに出かけた。充真院は庄屋に娘がいると知り、細工物の玩具を娘に贈るよう託したところ、その兄がお礼として立派な重箱に味噌漬けの香の物を献上しに来た。「よくも遠きへんひ成所にて、かやうなる重有も打寄申ぬ」と、江戸から遠く離れた地でありながら、重箱がたいへん立派なことに充真院は驚いた。この地の様子を聞くと、青物が無い土地であるが、さすがに庄屋の家なので大根や茄子を栽培しているが、家では一夏に茄子を一度食べるのも稀であるという。充真院は「よく〳〵珍敷大切にせし物をくれしと思ふ」と、庄屋の家が大切に蓄えていた貴重な味噌漬けを献上した事に感謝して、金玉糖をお礼に与えた。充真院は庄屋らに

とって、金玉糖は初めて口にする物であろうと、先刻聞き知った食料事情から思いを巡らせている。

なお、後日談として記してあるが、この地で充真院が子供らに菓子や簪を与えたところ、貰った者たちは生き返ったような心地――ありがたさに心が改まるような気持ち――になったという。簪は神棚にお供えして拝み、病気の時にこの簪を髪に挿すと早く快復すると語られて大切に扱われたとのことである。充真院が与えた簪は、一種の信仰の対象になったのである。充真院から下賜品を与えられた者たちは、殊の外うれしくありがたく思ったのである。充真院はこのことについて、「田舎は正直故、又かやうに申候はん」と、延岡の人々が正直だからこその行動と認識して、その心根を好ましく思った。

延岡の庶民との出会いは、当地の民の善良な気質により、充真院はあたたかく迎え入れられ、双方の対応はお互いに数々の感動をもたらせた。そして、お互いに贈答という行為から、心を通わせるに至ったのである。[28]

様々な地での庶民との出会いを通して見ると、大名家の一員として敬われながらも、庶民たちそれぞれの分相応の心遣いを、決して当然ではなく、ありがたくうけとめている充真院の謙虚な心を知ることができた。そして、行く先々で出会った子供や女性たちに対して、とりわけあたたかいまなざしを注いでおり、子供や女性たちとささやかながら交流を交わした、充真院の優しい人柄が窺がわれた。

（1）明大翻刻本、三四頁。
（2）右同書、四四頁。
（3）右同書、四四頁。
（4）右同書、六七頁。
（5）右同書、一一頁。以下に続く平塚に関する引用も同頁である。
（6）明石湊は右同書の五九頁、延岡は右同書の八〇頁である。なお、伊能論文は充真院が子供に対して、「道中のあちこちで子どもに興味を示す」（三〇頁）と指摘している。
（7）明大翻刻本、二二頁。この子供たちに充真院が困惑した件は、伊能論文の三〇頁に紹介されている。
（8）明大翻刻本、二六頁。
（9）右同書、二六頁。
（10）右同書、二七頁。以下に続く引用も同頁である。
（11）この幼女との一件は、伊能論文の三四頁に紹介されている。
（12）五月二十九日に延岡で一行が世話になった庄屋に娘がいることを知り、充真院が「細工物手遊び」を与えるよう托したことがある（明大翻刻本、八一頁。本稿の同章に後述）。但し、庄屋に対する感謝からであり、充真院と庄屋の娘とは会っていない。
（13）右同書、三〇頁。以下に続く引用も同頁である。
（14）右同書、四三頁。以下に続く引用も同頁である。なお、ふく屋で拳を楽しんだ件は、柴前掲書の九二～三頁に若干指摘がある。
（15）大坂の接客業たちとの交流は、本稿で紹介した以外にも五月三日に大きな料理屋で舞妓の歌や踊りを見物している様子が、明大翻刻本の五一～三頁に記してある。
（16）右同書、四七～八頁。
（17）充真院が間取りに興味があることは、柴前掲書の九一頁に指摘がある。
（18）明大翻刻本、五四頁。なお、明大翻刻本の当該頁は五月五日の記述が二つあるが、前者は後者の冒頭と内容が重複しており、おそらく充真院が書き始めてから一旦止めて、新たに後者として書き直したもの

と思われる。したがって引用は後者とした。

(19) 右同書、三八頁。充真院が義太夫に関心を持っていたことは、現存する充真院の蔵書の中に義太夫本があることからも確認できる。これは、明治大学博物館所蔵・内藤政道氏寄贈書の（三）充真院（繁子）関係（Ⅱ）六二の「千蔭岡持四季の心を戯作の長歌」である。

(20) 明大翻刻本、五六頁。

(21) 右同書、七二頁。

(22) 右同書、七三頁。

(23) 右同書の五五頁の船の見取図に、「小用所道にて湯殿にも」という説明があるので、風呂が船中にあったことは確かである。

(24) 右同書、七六頁。以下に続く引用も同頁である。

(25) 右同書、七九頁。

(26) 右同書、八〇頁。以下に続く引用も同頁である。

(27) 右同書、八一頁。以下に続く引用も同頁である。

(28) その他に、庶民らが充真院に贈物をしようとした事例は、四月十七日に蔵法寺前で小休憩をした際にも見られた。宿の者が充真院らに宿に伝わるつばのついた釜を見せ、幾つも贈呈しようとした。充真院は「心さし嬉しけれと、こまり候に付、一・二ッ計もらわんと、跡はかへしぬ」と、宿の心遣いをうれしく思いつつもこの贈物に当惑したが、宿の人の気持ちを無下にしては気の毒なので、一、二個だけ貰った（右同書、二六頁）。

八　食の楽しみ

長旅の日々において、食は楽しみの一つである。「五十三次ねむりの合の手」は、原則として一日の時間の経過に従って書き進めているので、食に関する記述が多数散在している。本章では充真院が食の感想をしたためた箇所や、道中ならではの食をめぐる出来事を見てみよう。なお、次章で名物である食物について扱うので、本章では名物以外の食を検討の対象とする。

まず、満足した食事についてふれておこう。四月十日に湯本（相模国）の宿・福住で温泉を楽しんだ後、「皆にも御酒遣し、我も何そ此土地の料理申附たへん物と思ひ」と、皆に酒を振舞い、地元の食材を用いた肴を所望する[1]。運ばれてきた肴は美しく、しかも工夫を凝らした漆塗の容器に盛り付けられていた。器の描写は「朱ぬり内金大広婦に足附に、色々の肴小皿迄のせ、肴取時は上を手近に成やうにしたる台」とある。

料理は美味で「りゃう理江戸に変らす風味よく、皆悦、昼膳もおいしくといゝし」と、充真院をはじめ御附の女性たちも満足した。なお、右の充真院の感想から、充真院の味覚の基準は江戸風であることがわかる。充真院が美味しいと評価する食べ物とは、江戸風の味覚なのである。

生まれ育った江戸よりもおいしく感じる食事に出会った事もある。四月二十一日に場所は定かではないが、関と坂下（伊勢国）の間に位置する店での出来事である。明記していないが関の地蔵に参詣する為に、早朝から出発して朝食を抜いていたと思われる。空腹の度合いが極まっていたので、おいしいという感想については、少し割り引いて考えるべきかもしれない。

その様子は「次向にても空腹とて、白す干にて茶つけをたへしか

夫はいかゝと申けれは、猶よからんとて出させけれは、夫にてはあまりとて、おさい〳〵をこしらへ出しける、香物はこゝよくつきたる菜、私初誰も〳〵おいしく、江戸よりこゝか口にあひしと悦、直に昼といわれしか、夫もかまはすたへしと笑ひ」とある。[2] 休憩した茶屋と思われる店で、しらす干しのお茶漬けを用意させたところ、店の者が御茶漬けだけでは気の毒に思い、おかずを拵えてくれた。中でも漬物の漬かり具合が最適で、充真院をはじめ皆がおいしく食べ、江戸の食事よりもここの食事が口に合うとおおいに悦んだ。昼食の時間が迫っていたが、充真院たちはかまわず食べ続けた。江戸屋敷での生活は概ね規則正しく、空腹に悩まされるのは旅だからこその経験である。

なお、空腹がおいしさを弥増した例として四月二十四日の様子も示しておこう。大坂屋敷に到着する前に船中で、「皆空腹に成、頼て塩むすひこしらへもらひ、あたゝかにておいしきよし」と、一行は空腹を感じたので塩結びを作らせて食べたところ、温かくておいしかったとある。[3] 空腹時に口にした、しかも温かな塩むすびは格別おいしく、空腹がおいしさの源であることを実感している。一行が乗船している舟は、「舟にかまと有との事也、随分御せんも出るとの事」と、竈があり御膳を拵えられる程の設備であった。

体が消耗していた為、殊更においしさを感じた場合もある。五月十五日に充真院が金刀比羅宮で体調不良のため休憩した時に、御附の者が気を利かせて練り羊羹と干菓子を差し出した。これらの品は「至て宜敷風味」と、充真院は極めて簡潔ながらも絶賛している。[4] 消耗しきった体に、甘味が染み渡るように美味しく、生き返るような心地を感じたのではなかろうか。

一方、食に関して残念な思いも経験した。豪華な膳を目の前にしながら、体調不調の為に食べられなかったのである。五月十五日に金刀比羅宮の参拝を終えて、茶屋の椛屋の二階の座敷で横になり休憩した時である。「鉢・肴・御酒・くわし・二汁五さいの膳、其外いろ〳〵出させ候へとも、一口もたへす」と、用意された数々の料理を全く食べられなかった。[5] 充真院が「かやうに丁寧ならすともよさそな」と言うと、先例であるとの返答があった。椛屋は内藤家の定宿であり、「誰参り候ても、二度と一色の品は出さぬよし、十日くらひは違たるもの出す」と、如何なる客人にも一度供した料理は出さぬよう、十日程は違う料理を出すという。配慮が徹底した店の豪華な料理を前に、充真院は一層残念だったと思われる。

極めて稀だが、飲食をめぐって不便を感じたり憂えたこともある。それは、四月二十四日に伏見から淀川を下った時である。[6] 充真院らは船中で茶を飲もうとしたが、茶碗と土瓶の用意をしておらず船頭に依頼する。充真院と同じ船に乗船していたのは奥附と女性たちで、人数はおよそ二十名ほどであり、茶碗を二十人揃い程と土瓶を三、四つ所望した。船頭は上陸して土瓶一つと茶碗十個を調達して戻るが、数が不足していたので、充真院らは「何ても〳〵早く〳〵」と船頭を急かして、再び探しに行かせた。午前中の行程が長く昼食を

摂る時間が遅れ、咽の渇きが極まり早く茶を飲みたかったのであろう。

結局、船頭は「六ツ何か楽焼の様にてほつ〳〵立しきたなく茶わん出したる」と、楽焼の様に表面にぼつぼつがある汚い茶碗を六つ持ってきた。しかし皆は「是ては茶もおいしくもなし」と呆れて不平を漏らすので、充真院は「なきにはまし」と言い聞かせて一同で茶を飲んだが、「哀となさけなく思ふ」と憂えている。しかしながら、すぐに昼食の時間となり、「弁当持たふへ、右之六ツ成茶わんにてきたなき乍食事もされしとわらひ居」と、わずか六つの汚い茶碗とはいえ無ければ食事ができないと言い、笑って食事をしたのである。充真院は拠所ない不快・不満な状況に遭遇しても、周囲の者をなだめ、むしろ有難さを見出し、さらに笑いに変えたのである。

次に、道中ならではの食をめぐる体験として、食らわんか舟との一件をあげておこう。四月二十四日に、以前から聞いていた淀川水系の食らわんか舟による食物販売を目にする。[7] 充真院は食らわんか舟を見ることを楽しみにしており、「くらわんか舟の様子見度と、来りたらは呼て何とかいひて聞せよと申付し所」と、食らわんか舟が近くに来たら呼び止めて、販売の口上を述べさせよと命じている。

幸いすぐに食らわんか舟が来たので、声を掛けさせたところ、食らわんか舟の者は充真院らの舟に漕ぎ寄せて縄で固定してから、「何くろう」と呼びかけてきた。品物を尋ねると、「餅も酒も早ふくらへ」と大声で返答がある。充真院はこの販売口上が聞きたかったのである。「いさや来たりしと思て」と充真院が食らわんか舟を覗くと、「いささかなる箱に串にさしたるあんもちと、へつい様なるものに釜かけ、徳り持つけて有」と、簡単な箱に串に指した餡餅と竈の様な物に釜を掛けて酒を入れた徳利が見えた。

最初に餡餅を見せるように言うと、食らわんか舟の船員は「餅くらへととれ程くろう」と購入する数を問いかけて、餅を掴み出して「サアくらへ」とのことであるが、その様子が充真院には「何かきたならしくつかみて出し」と見える。酒を購入しようと声を掛けると、「入物を早くよこせ」と横柄な返答である。そこで茶碗を出して「サア是へ」と促すと、徳利から茶碗に注いで返して「早くくらへ」と返答がある。酒の肴に何を用意しているか尋ねると、「竹の子のおつゆ」があると返答がある。[8] 食らわんか舟の者は始終乱暴な言葉使いにもかかわらず、「おつゆ」だけ丁寧な言葉を使った。充真院は「又おつゆかおかし」と愉快に感じた。

食らわんか舟から購入した餡餅を食べると、「こげくさくいやな匂ひして、あまくもなく、ちやり〳〵と口中に当たる由、二ツとはたへられぬ品と皆々いひて」と、極めて粗悪品で、充真院一行はたいへん閉口した。

その後も食らわんか舟の者は、無闇に「くらへ〳〵」と呼びかけていたが、充真院の舟の者が問いかけはするが購入しないので、立腹して文句を言っていたがそのうち離れていった。相手が大名家の人々であっても、平気で口汚く文句を言う食らわんか舟の者たちの

態度は、当地の人々の気質ゆえといえよう。

次に祝膳と心祝いについて見てみよう。祝膳は旅の節目に用意された。四月二十四日に七つ半（午後五時）過ぎに大坂屋敷に到着して風呂に入った後に、「心祝に御酒・吸物申附候」と、お酒と吸物を用意させて、無事に到着した事を祝った。[9] 既に船中で塩むすびを食べた後である為、祝膳とはいえ簡単に済ませた。

五月五日にも祝膳が振舞われた。この日は端午の節句と充真院一行の旅立ちの日であり、祝膳を用意した。一方、夕食は簡略に済ましざるを得なくなった。夕方の七つ時（午後四時）に大坂屋敷を出発して、夕膳を船中で食べる予定でいたが、出発の準備で船中が大混雑したので、茶漬けを食べてしのいだという。[10]

心祝いは充真院から随行者に対する慰労としてであり、自分の誕生日に食べ物と酒を振舞おうと考えていた。その様子は五月十九日の条に「何よし此間うちより、私之誕生日には何そ心祝にたへさせ、少々酒にても出し度と思ひしゆへ」としたためられている。[11] 十九日は鞆の浦（備後国）に滞船しており、当地の漁民の女性が頭上に鯛・蛸・鱈・鰡を入れた飯台を掲げて売りに来たので、心祝いの食材として飯台二つ分ほど購入した。御附の者たちは充真院からの心祝いとして、新鮮な鯛・蛸・鱈・鰡など当地の魚介類と酒を堪能したのである。充真院の心祝いは随行者に対する感謝の気持ちの表れであり、心遣いでもある。なお、充真院の誕生日は閏四月十三日であり、[12] 文久三年には閏四月がないので相当する時期として五月の中頃に誕生日の心祝いを振舞ったのであろう。

食に関わる愉快な出来事にも遭遇した。三机に五月二十二日に入港した際、波に揺られて薩摩芋が沢山流れてきたのである。ちょうど、船旅の無聊を慰める為に積み込んだ菓子を切らしていたので、皆で喜んで薩摩芋を拾った。その様子は「波にゆれて、さつま芋流来るを見て、船中の慰に用意したる菓子も、長の船中たへしまひし故、定めしかの芋あらんとて、皆々悦てさかさせし所、芋沢山に整来りて悦」とある。[13] 大名家の人々が楽しげに海から流れ来る薩摩芋を拾っている様子を想像すると、何かユーモラスである。

最後に、充真院の好物に関する興味深い記事をあげておこう。充真院は赤飯と煮染が好物だったのである。これは四月十一日に山中（相模国）の宋閑寺で小休憩した時の記載から確認できる。この寺は「赤飯に煮染そへ出し、少し空腹にも成し事、好物故、嬉敷たへし」と、赤飯に煮染を添えて供してくれ、充真院は空腹でもあり、しかも好物なので嬉しかった。しかしながら残念なことに、「けふりくさくて一口もたへられす」と煙臭くて食べられなかったのである。[14]

（1）明大翻刻本、一七頁。以下に続く引用も同頁である。
（2）右同書、三〇～一頁。白干茶漬けをおいしく食べたことは、伊能論文の三六頁に指摘がある。
（3）明大翻刻本、三七頁。以下に続く引用も同頁である。なお、空腹に悩まされた事例をもう一つあげておくと、四月二十三日の八つ半（午

後三時）頃に大津から伏見に向かう途中で「空腹にてこまりし」（三四頁）とある。

（4）右同書、六五頁。

（5）右同書、六七頁。

（6）右同書、三六頁。以下に続く引用も同頁である。なお、伏見の船着場は京橋にある。『都名所図会』巻之五の「京橋の辺」に説明がある。当該部分は『新版　都名所図会』（角川書店、昭和五十一年）の六一六頁である。

（7）明大翻刻本、三六頁。以下に続く引用も同頁である。

（8）右同書、三七頁。以下に続く引用も同頁である。なお、食らわんか船の一件は柴前掲書の九二頁と伊能論文の三八頁に紹介されている。柴前掲書では食わんか舟の者が横柄な事と、餡餅が劣悪品だった点を指摘し、伊能論文では「竹の子のおつゆ」の返答を充真院がおかしく感じた点を特記している。

（9）明大翻刻本、三八頁。

（10）右同書、五四頁。

（11）右同書、七〇頁。

（12）充真院の誕生日は「政順様御婚礼御双方問合書付留帳」に収載された文化十二年（一八一五）三月の内藤家から井伊家への問合せに対する返答に「充姫様御誕生日　閏四月十三日」と記載されている。なお、『内藤家文書増補・追加目録8　延岡藩主夫人　内藤充真院繁子道中日記』（明治大学博物館編集、平成十六年）の解題の二六六頁と伊能論文の一七頁は充真院の誕生日を五月十五日としている。五月十五日説については、右の明大翻刻本解題と伊能論文には典拠が記されていない。推測ではあるが、太陽暦が使用されるようになってから、閏月がないので相当する時期として五月生まれということにしたのではなかろうか。この点については、後日、さらに検討したい。

（13）右同書、七三頁。

（14）右同書、一九頁。

九　名物への関心

充真院は道中で各地の名物を食べたり、眺めたり、入手したりしている。充真院が出会った名物は実に様々で、お菓子や海産物をはじめとする食物や、木製品や陶器、布製品などの工芸品もある。充真院は事前に名物に関する知識を得ており、現地で実際に確認するのを楽しみにしていたようである。名物を自らの希望で購入する場合もあれば、地元の民から好意で贈られる事もある。購入の場合、通行中はその場で直接購入するが、宿泊先では陸路・海路共に、各地の内藤家御用達の商人に名物を宿泊先や停泊地に取り寄せさせて選ぶことが主である。以下では旅の行程にしたがって名物を紹介しておこう。

旅の前半の陸路では東海道の名物に親しんだ。充真院が旅の初めに出会った名物は、四月七日に程ケ谷と藤沢の間で小休憩をとった境木（充真院は「堺木」と表記）という地の「きなこ附たるやわ〳〵」である。[1] やわ〳〵とは「柔柔」とも表記し、牡丹餅の女房言葉である。したがって、黄粉をまぶした牡丹餅である。「名物之由、誰も〳〵たへ申候」と、名物なので一行の多くの者が食べた。

さらにこの日は昼の休憩をした藤沢（相模国）の宿で、「蛯、外に名物の由貝細工抔もらひ」と、海に近い当地の名物である蛯と貝細工を贈られた。

四月十日は小田原（相模国）で、「御城下と成と人も知れるういろうと云う茶や有は」と、小田原名物の菓子であるういろうを供する茶屋を通行しながら眺めた。[2] さらにこの日に昼休みをした箱根湯本の旅館・福住で「所之絵図と丁寧にこしらへしけん玉到来す」と、当地の絵図と剣玉を貰う。[3] 箱根は木製品の製造が有名である。湯本の木製品は箱根細工と称し、土産物として製作・販売されていた。「色々の木地細工物有との事聞きつれと」と、当地の名物である様々な木製品について話を聞いた。[4]

さらに箱根の畑宿の鈴木と言う宿で小休憩をした際には宿の座敷に上がり、「色々なるぬり物品、又木地なるも有、又かわゆらしき子供の手遊やうの品もならへ付有と」と、様々な塗り物や木製品、及び子供の玩具などを見た。様々な木製品を「よきと思へる品もあれと、長の旅路、荷に成ゆへに少し計整見すくす」と、充真院は気にいったものの、長旅であり荷物になるので少しだけ購入した。土産として名物を購入したのは、この旅では五日目の畑が初めてである。なお、この畑の宿は縁側の要所は寄木細工を施しており、その様子を「ゑんかはゝ木地をぬりてつる〳〵とし、用所抔は皆よせ木」と記している。畑宿は寄木細工が名物であり、建具の一部にも用いていた様子が充真院の目にとまった。

畑の宿では「あへ川餅名物之よし到来す」と、名物として安倍川餅が届いた。安倍川餅はこの先の駿河国の安倍川付近の府中の名物で、東海道の名物として名高い。この日は芦ノ湖を過ぎた付近の「出茶屋」――すなわち立場茶屋、有東坂の甘酒茶屋のことであろう――が「あま酒名物之よし」と記している。充真院は名物の茶屋を目にしたが、実際に甘酒は飲んではいないようである。

四月十二日は、吉原と蒲原の間の宿である岩渕（駿河国）で小休憩した折に、斉藤縫左衛門が経営する宿で名物の栗の粉餅を食べた。充真院の口には合わず、「つまらぬ品也」と手厳しい感想である。[5] しかしながら当地の名産品である瑪瑙細工は気にいり、「小休に持来り、少々整候」と、休憩所に取寄せて気にいった品を少し購入している。

同日に倉沢の海辺で「蛇・さゝゐのつほ焼名物との事[6]」と当地の名物である蛇や栄螺の壷焼きを目にしたが、「あまり風味もよろしそうにも見へす、少しきたなけに見へしまゝたへす」と、美味しそうでなく見た目も不衛生そうなので、充真院は口にしていない。

一方、好みの品は沢山購入している。四月十二日に興津（駿河国）の本陣に到着した際に、当地の名物興津鯛――甘鯛の干物――は充真院の好物なので、沢山購入した。その様子は「おきつ鯛名物、好る品ゆへ沢山に整行」とあり、この旅行で初めて同一品目を大量に購入した。充真院の好物であり、干物なので長旅で保存食が効き、しかも嵩張らないこと、さらに道中でのおかずとして利用する為にも沢山購入したのであろう。[7] 興津鯛は当時、祝いの席に供される縁起の良い食物である。充真院は当地で好物の興津鯛を購入することを、楽しみにしていたのであろう。なお、興津鯛は淡白な味の白身

魚である。充真院の味覚の嗜好が窺がわれる興味深い記録でもある。

四月十三日に江尻と府中の相の宿である小吉田（駿河国）の稲葉源右衛門で小休憩をとった時に、充真院は好みの名産品を見つけた。当宿には「木地物細工多、好なる品もあれと、荷に成しゆへ、たはこ盆・たにさく（短冊）入のみ持行[8]」と、沢山の木地物細工の中に充真院が欲しい物があったが、荷になるので我慢して、煙草盆と短冊入れのみを入手する。当地では「小吉田すし名物の由、小なるおけに入て有」と、名物の小さい桶に詰めた桶寿司を見た。

四月十四日は小夜の中山（駿河国）で、夜鳴き石伝説で有名な、名物飴の餅――水飴で包んだ餅、子育て飴――を入手する。飴の餅について、「さよの中山にかかり、あめの餅名物の由乍、かねてきたなき事聞しまゝたへす」と、当地の名物であるが以前から充真院は飴の餅は不衛生な物と聞き、ましてや食べたこともなかったという[9]。しかしながら、「あめ計取て行過し見し所、咄しには似す、随分よろしそうに見へ候、此節せき出る故、幸とかこに入持行」と、飴の餅を購入してみたところ、かつて聞いたように不衛生な物ではなく随分安全な品に見えたので、最近咳が出るのでちょうど良いと思い、充真院は自分の駕籠に持ち込んだのである。

事前に他者から情報や噂を得ていても、先入観に惑わされず、実際に自分の目で確認して判断する点は、充真院らしいといえよう。名物飴の餅は充真院の駕籠に入れられて身近な常備品となり、充真院の咽を潤しつつ旅のお供をしたのである。

四月十六日は新居関（駿河国）を通過した後、本陣の疋田弥五郎で、「御酒・吸物・肴二・くわし・うなき[10]」などを昼食として摂り、その一品として鰻を食べる。新居は浜名湖のすぐ西側で、鰻は水辺の町ならではの産物である。充真院は名物と明記していないが、当地の名物であることは確かである。

大浜（三河国）では、四月十八日に小休憩をした時に、「こゝはそはの名物とて、そは粉到来して」と名物の蕎麦粉を店から貰う[11]。さらにこの店は、「そはと吸物、口取の品いろ〳〵出し、一統へも出し、風味も随分よく」と、打った蕎麦と吸物、口取などを一行に振舞ったうえ、供された食物は風味がたいへん良くおいしかった。

なお、この小休憩の時に蕎麦を振舞われたのは、実に思いがけないことであったようだ。まさに出発しようとしていた時、休憩所が充真院らに御膳を準備している様子に秀が気づき、「今膳立して何か出すやうす、知らぬ貌して居てもよからんか、又男之方へ知らせ候わん哉と申、いつれ何とかいわんといへるうちに」と、その対応に慌てているうちに膳が出てきた。

同日に池鯉鮒（三河国）の本陣・永田清兵衛で小休憩をした際に、金物細工を少し購入し、さらに鳴海で尾張徳川家が奨励した当地の伝統工芸として名高い有松絞りを、休憩した宿・鈴木与右衛門で調達した。この日に宿泊した宮の本陣・大塚与六郎でも有松絞りや金物・小間物などを取り寄せて購入した。

四月二十日は小向（伊勢国）で桑名名物の焼き蛤を食べる。当時、

小向立場は茶屋が焼き蛤を販売していた事で知られる。焼き蛤は東海道の名物として有名であるが、充真院の口には合わず、「兼て風味よしと聞しかと、あまり宜敷も無」と、以前から美味しいと聞いていたがさほど美味しく感じず、期待はずれであった。[12] しかも焼き蛤を販売していた店の状態が、「夫に此家のむさき事はいふもさらなり」と雑然として不潔であり、不快感がつのった様子である。

四月二十一日は関（伊勢国）で小休憩をとった際に、当地の名物である関の戸を食べる。充真院はこれまで食べた東海道の名物の中で、関の戸を殊の他気にいり大絶賛する。その様子は、「小休にて関の戸餅たへふ、此品こゝ迄の名物の内にては一番よし」とある。[13] 関の戸は求肥で漉し餡を包み、その上に和三盆糖をまぶした、上品な御菓子である。和三盆糖は鈴鹿山に積もる雪を見立てており、風流な趣向でもある。それゆえ、普段から大名家の一員として洗練された食物の味覚や形態に慣れ親しんでいる充真院の嗜好にあったのである。

同日に鈴鹿山では当地に生息している河鹿を購入した。河鹿の声は、「折々かしかの声しておもしろく」[14]と、充真院は趣がある鳴き声と感じた。そして道沿いに河鹿を販売する者が居たので、「売物居し由故、五ツ・六ツ取て行よといゝて」と、五・六匹購入するようにと、御附の者に充真院が命じている。

同日に訪れた土山（近江国）は良い茶の産地と聞いていたが、「取寄見、好候事にもなく候まゝ、あまりよきともおほえす」と、取り寄せて品定めをしたが気にいらず、余り好い品とは思えなかったと充真院は感想を述べている。茶の購入は取り止めた模様である。[15]

一方、必ずしも気にいらないが、妥協して購入した事例もある。同日に水口（近江国）で宿泊した本陣・鵜飼伝右衛門では、「戸細工名物之由ゆへ取寄見、少々整申候」[16]と、当地の名物である戸細工を取寄せて少し購入する。もっとも充真院の好みに合う品が取り寄せた中にないので尋ねて見たところ、良い品は直に売り切れてしまい、次の仕入れはまだ先とのことであった。

四月二十二日は草津（近江国）で、当地の名物である瓢箪を沢山購入する。「此辺ひゃうたんの名物とていひしゆへ、もはや旅も少々に成し故、持行れぬには有ましと思て沢山に整」とある。[17] 大坂屋敷までの陸路の旅は残り少ないので、荷物として持っていけないことはなかろうと判断して瓢箪を多数購入したのである。瓢箪は加工して酒入れや花瓶などに使えるので、手頃な土産だったのであろう。なお、一品目を多数購入したのは、先に紹介した興津鯛の購入以来久々である。

なお、草津では名物の姥餅を食べたが、不味くて閉口する。「名物うはか餅との事故、申附たへし所、風味人にはよしといへと、水ほくてたへられ不申候」と、姥餅は名物なので購入を命じて食べたところ、おいしいと言われているが、充真院に水っぽい味で食べられた物ではないとの感想である。[18]

四月二十三日は鳥井川（近江国）で小休憩した時に、充真院のも

とに茶壺に入れた新茶が献上された。この茶壺は付近の名産品である勢田（世田）焼きである。[19]

名物として著名だが、充真院が興味を示さず購入しなかった品もある。それは大津絵である。四月二十三日に伏見に向う途中で、御付きの者が大津絵を販売している店を目に留めて充真院に「大津絵よし、入用ならは整候はん」と申し出た。[20] しかしながら充真院は「珍らしからぬ品ゆへいらし」と、珍しくないので不要であると断った。

充真院は絵に関心を寄せている。[21] 随行者が充真院に必要ならば購入しようかとわざわざ声をかけたのは、充真院が日頃絵に親しんでいる事を十分理解しているからこその心遣いである。それにもかかわらず充真院が大津絵の本場で購入しなかったのは、前述した返答からは既に江戸にいた当時から大津絵を入手しており、あえて買い足す必要がなかった可能性が考えられる。さらに実家の井伊家は近江国が本貫地なので、近隣である大津の名物を従前から知り尽くしていたからかもしれない。

伏見の本陣・丹波屋では「色々の品物有て、みやけに成そう成もの整行」と、土産にふさわしい品が様々用意してあったので購入した。[22]

取寄品を大量に購入したのは、大坂屋敷で過ごした四月二十五日と二十六日である。二十四日に大坂屋敷に到着した際に、「明はいろ〳〵の品取寄候はんと書附て出し」と、翌日から大坂屋敷に出入りの商人から様々な品を取寄せ購入するために、購入希望品を書類にしたためた。[23] そして二十五日と二十六日は「色々成整物にて日を暮し候」ということである。この時に購入した品物について具体的な記述は無いが、状況から推測すると、この先の船旅で必要な品や大坂の名物などを見繕ったのであろう。

延岡の人々に贈る大坂土産は、さらに五月一日に随行員たちを大坂の町に出向かせて調達したことが確認できる。「皆のものは延岡みやけの品を整に出し遣し」とある。[24] 前述したように充真院は大坂見物以後、屋敷に篭って過ごした。土産物を見繕う為に自らも大坂の町に出かけたく思ったが、考え直して止めた様子が「私も今一度出て見んと思へとも、江戸と違、何か大そうにて、兼て思へるとは違、出かね居」から確認できる。大坂は江戸と違いどことなく大げさであり、以前から思い描いていた様子とは違うので、自ら土産を探しに出かけるのは止めたのである。

大坂で気にいらず入手しなかった品は、当地で上梓した錦絵である。五月三日に天満天神を参拝した後に立ち寄った茶屋で、役者絵を見せられた。「此辺の錦絵、もしや御用にも成候哉」と絵を好む充真院が必要かもしれないので用意されたようだ。[25]

役者絵を眺めたが「江戸のと違ひ、何かいやらしく、只見候計、不用とかへ申候」と、江戸で出版された錦絵とは異なり、なんとなく嫌な感じがするので、見たけれども購入しなかった。[26] 充真院の審美眼に相容れない役者絵だったのである。

この役者絵の描かれ方は、「役者なから、貌は誠におつにて、見

るかひもなく候へとも、すり方は金を入、帯は毛織の様に金入、髪はつや〳〵として、指物は銀にてひか〳〵、色のよき事はかみとは思はれす、切の様乍」と、役者絵でありながら顔の造作が平凡、かつ粗末で、金粉を施して刷り、帯は毛織に見えるように金を用い、髪はつやつやして指物は銀で光り、発色が鮮やかすぎて紙に刷った様には見えず、まるで布に印刷した様に見えたという。[27]

換言すれば、美しく人物を描くべき役者絵でありながら顔の描写が下手で、色合いは金銀をむやみに用い過度に光らせて派手で、全体がけばけばしく重苦しいのである。このような絵は充真院の美的感覚とは、相反する作風なのである。大坂の錦絵に対する充真院の評価は、たいへん率直で辛辣である。同時に、充真院の美意識が具体的に窺がわれる貴重な記述でもある。大坂の錦絵に対する辛口の批評から察すると、この対極にある充真院の美的な感性とは、巧みな筆致と穏やかな色合いを用いた繊細で上品な作風である。[28]

五月三日は大きな料理屋に訪れて、食事の前に訪問地の名物である糸切団子のような物を食べる。糸切団子とは、生地を細長く伸ばし、糸で輪切りにして餡をまぶした団子であるが、充真院の記述は「此所の名物とて、糸切たん子やうな、風味よきもの」と、糸切団子の様な形で美味しい物と類似品の様な表現である。[29]「空腹にも成まゝに皆悦たへぬ」と、空腹だったので一同は喜んで食べた。

五月八日に明石（播磨国）で人丸社に代参した随行員の男性らが、当地の名物の明石焼を目にして充真院にその様子を伝えた。「明石焼とておつなふつ〳〵立しいろ〳〵の物有」と、明石焼は表面がぶつぶつした風変わりな焼き物で、様々な種類の品があったという。[30]翌九日は風が強い為、引き続き明石に滞在して、昨日随行員の男性らが代参した人丸社を充真院が参拝した。人丸社で御影と歯痛を治すお守りを戴き、「地の名物とて梅干と松露に致し候くわしもらひ候」とあり、名物の梅干と松露饅頭を贈られた。[31]十日は赤穂坂出（播磨国）にて砂野が実家の人たちと再会した際に、実家から充真院一行に「国産之品色々到来す」と、当地の様々な国産品が心尽くしとして届けられた。[32]

五月十二日に牛窓（備前国）で「備前品々整候」と当地の特産品を購入した。[33]牛窓では「備前焼上物色々持参り、船懸りの内、小倉袴・さなた帯類多持参り、沢山に整申候」と、船繋りの間に船に多数の備前焼や小倉袴、真田帯などを当地の商人に持参させて、あれこれと選び沢山購入した。様々な名産品を前に、充真院は楽しく好みの品物を選んだのであろう。

五月十九日に鞆の浦で名物の莫蓙を購入した。その様子は「備後こさ、名物とて持来る故、整度とて思しと、よきのは皆江戸廻しに成無との事故、致方なく悪とてなきにはましと整候」とある。[34]莫蓙は名物なので当地の商人が船まで持参し、充真院も莫蓙を手に入れたく思い品定めをしたが、良い品は江戸に販売の為に送り、ここには無いということであった。しかし、粗悪な品でも入手しないよりはましと考えて購入した。好みの品でないのに妥協して購入するの

は、充真院としては先の水口の戸細工以来で実に珍しい。

以上、充真院が旅で出会った名物を紹介した。これまで知識として聞き知っていた名物を、現地で実際に確認した事は、好奇心豊かな充真院にとって興味深く、貴重な体験となったはずである。[35] 各地で様々な名物を見聞して、充真院は一層知識を豊かにしたことであろう。

購入に際しては、充真院は自分で実際に現物を見て判断することを大切にした。気にいらない品を購入したことも稀にはあったが、大部分においては妥協せず気に入ったからこそ購入している。特に、充真院の趣味であり特技の一つである絵については、審美眼に合わぬ作品は充真院の神経を逆なでしたようで、たいへんはっきりと酷評というべき感想を表している。名物との関わりは、充真院の旅に楽しさをもたらした。さらに、充真院が品物に対して、確固とした好みを大切にしていることや、充真院の美的感性を窺がい知ることができた。

（1）明大翻刻本、一〇頁。以下に続く引用も同頁である。なお、当地について充真院は「武蔵と伊津の堺之よし」と記しているが、正しくは武蔵国と相模国の境である。なお、境木の名物が牡丹餅であることは、近世の地誌として名高い『江戸名所図会』巻之二に「界木」の説明の末尾に「この地牡丹餅を名産とす」（『新訂　江戸名所図会』二、ちくま学芸文庫、三〇二頁）と記載してある。さらに牡丹餅は、箱根の関所を通行する手続きを家臣がとっている時、充真院らはその手前の茶屋で待機しながら「こゝよりやわ〳〵出し、夫にて茶のみ」（一八頁）と再び食べている。

（2）明大翻刻本、一三頁。

（3）右同書、一七頁。この剣玉は前述（本稿（1）の第二章九頁）したように、挿絵を描いてある。さらに、剣玉の形態についての説明も詳しく、「上之方にては御酒のみ候様にちょくなり、下の方はなみに有よりあさく、玉ののる様にしたる物」とある。

（4）右同書、一八頁。以下に続く引用も同頁である。

（5）右同書、二一頁。以下に続く引用も同頁である。

（6）右同書、二二頁。以下に倉沢の続く引用も同頁である。名物が蚫や栄螺であることは、『東海道名所図会』巻之四に紹介されている。当巻に「名産栄螺鮑」という項目があり、西倉沢の茶店で鮑や栄螺を料理して販売していた事や、茶屋は海岸に向かう崖造りで、富士山や三保の松原が見え東海道における無双の絶景と説明がある（『同』二名所図会叢刊十三、新典社、昭和五十九年刊、一二八頁）。

（7）明大翻刻本、二二頁。

（8）右同書、二二頁。以下に続く引用も同頁である。

（9）右同書、二四頁。以下に続く引用も同頁である。

（10）右同書、二六頁。

（11）右同書、二八頁。以下に続く引用も同頁である。

（12）右同書、三〇頁。以下に続く引用も同頁である。

（13）右同書、三〇頁。充真院が関の戸をおいしく食べたことは、伊能論文の三六頁に指摘がある。

（14）明大翻刻本、三一頁。以下に続く引用も同頁である。充真院が河鹿を購入した時期について、拙稿「日向国延岡藩内藤充真院の好奇心――『色々見聞したる事を笑ひに書』を素材として――（1）」（『城西経済学会誌』第三十四巻、平成二十年）の一七～八頁で、充真院の三度目の旅日記「三下りうかぬ不調子」に宇津ノ谷峠で河鹿の声を詠んだ短歌がしたためてあることから、河鹿を購入したのは慶応四年（一八六八）閏四月二十八日とした。しかし「五十三次ねむりの合の手」の四月二十一日の鈴鹿山の記述により、第一回目の旅で河鹿を購

入したと見なす方が妥当である。充真院が河鹿を購入したのは六十四歳であった文久三年四月二十一日であり、場所は鈴鹿山と訂正しておきたい。なお、右の拙稿について本稿では以後、拙稿「好奇心」と略記する。

(15) 明大翻刻本、三一頁。なお、右同書では当地を「大山」と翻刻しているが、正しくは「土山」である。

(16) 右同書、三一頁。

(17) 右同書、三一頁。

(18) 右同書、三一頁。

(19) 右同書、三二頁。

(20) 右同書、三四頁。以下に続く引用も同頁である。

(21) 拙稿「蔵書」四頁で、現存する蔵書中に絵画に関するものがあることを指摘した。

(22) 明大翻刻本、三四頁。

(23) 右同書、三八頁。以下に続く引用も同頁である。

(24) 右同書、四九頁。以下に続く引用も同頁である。

(25) 右同書、五〇頁。

(26) 右同書、五一頁。

(27) 右同書、五〇～一頁。

(28) 充真院の美的感性について、拙稿「奥方の蔵書――日向国延岡藩内藤充真院の場合――」（『日本歴史』第七三〇号、平成二十一年）で、ささやかな美しさを好み、金銀・綺羅刷りなど絢爛豪華な品を好まない趣向を指摘した。この見解と今回の検討結果が一致した。

(29) 明大翻刻本、五一頁。以下に続く引用も同頁である。なお、明大翻刻本に「糸切たんす」と翻刻してあるが、正しくは「糸切たん子」である。

(30) 右同書、五八頁。

(31) 右同書、五九頁。

(32) 右同書、六〇頁。

(33) 右同書、六〇頁。以下に続く引用も同頁である。

(34) 右同書、七一頁。

(35) 充真院は好奇心豊かな人物で、その多岐にわたる関心の様子を、拙稿「好奇心」（1）（2・完）で紹介した。

十　風景への感動と文学

本章では充真院が感動した風景を紹介しながら、充真院が風景に心を打たれて短歌を詠んだり、文学に思いをはせた様子について示しておこう。

まず、感動した風景についてである。充真院は道中で美しい風景を目にすると、その場所や状況を記録している。とりわけ心を揺さぶられると、その思いを日頃から親しんでいた短歌に込めた[1]。

四月九日に、梅沢（相模国）の手前にある寺に立ち寄り、庭の向こうに広がる景色に心を奪われた。この寺は「本堂は古く、座向はかなりにて、庭の向は田を見はらし、咲残たる蓮・花・草・菜の花、所々にありて詠よく、夫に雲雀舞、蛙の声おもしろく」と、古びた本堂があり、庭の後に田が広がり、蓮や草花、菜の花があちこちに彩りを添え、その景色は短歌に詠むのに相応しかった。しかも、空には雲雀が高く昇って囀り、蛙の鳴き声も聞こえるなど、趣があった。充真院はこの風景を目にして、「少しはなくさまれ、茶いれさせ、くわし抔取出し」と、少し心が慰められ、茶と菓子を用意させて寛いだひと時を過ごした[2]。

ところで充真院はこの寺について、鎌倉光明寺末の寺院と記したものの、具体的な寺名を明記していない。手がかりは梅沢の手前――東海道を下向しているので、すなわち東――という寺の場所と、古い本堂があること、光明寺と同じ宗派――浄土宗――であることなどである。この手がかりに最も該当するのは知足寺である。知足寺は梅沢から東に位置する二宮村にあり、本堂は永禄年間（一五五八～一五七〇年）に建立されており、宗派は浄土宗である。但し、知恩院末の寺院であり、光明寺末ではない。しかし、光明寺が御十夜法要で有名なように、知足寺は二宮の十夜寺として名高い点が同じである。したがって、充真院が訪れたのは知足寺とみなしてよかろう。[3]

倉沢の山の麓を通行して浜辺にさしかかった付近では、松並木の枝振りの良さに感心している。これは四月十二日で「左は松なみ、其ふりのよさ、下に波打きわにて、海人の家居見へ、其松のふりのよき事、絵にも書たる様にて枝たれ、其間より沖之方、蜑のいとなみするも見へ」と、波打ち際に生えている松並木の枝振りの良さを繰り返し讃え、その間から漁師の家が見えると記載している。[4] さらに夕方に、興津の本陣に到着する手前で「夕刻に成行は、虫之声なとし、珍らしく聞つゝ行」と、虫の音を耳にして珍しく思っている。充真院の風流な趣向が窺がわれる。[5]

充真院が殊の外気にいったのは、島田（駿河国）の風景である。四月十四日に「此辺の気色は、田の向に小家有て、松はらにも百性やおり〳〵有、今迄のうちには一番よくと思ふ」と、田が広がる後方に小さな家が見え、松原にも百姓家が散在する漁村の風景に心魅かれ、ここ迄の道中で見た景色の中で最も良いと感想を述べている。[6] 広々とした漁村の風景は、江戸の日常生活では目にする機会が無く、充真院にとって新鮮な風景と感じられたのであろう。

水辺の風景は、充真院の心を度々魅了した。四月十六日に浜名湖（遠江国）を船で渡りながら目にした景色を、「広き泉水の様に思われ、心も落附けるまゝ、寂ふりもやうし、只気しよく気色もよくと計、少し茶てものみ度」と、泉水の様に静かな湖面を眺めて落ちついた心地となるが、同時に寂しさも感じた事、さらに良い天気で気持ちが良く、茶を飲んで寛ぎたいと思ったという。[7] 淡々とした描写ながら、充真院が湖上の静謐な景観を堪能した様子が伝わってくる。

著名な景勝地を訪れる機会もあった。当時風光明媚な地として名高い近江八景の一つである勢田（充真院は瀬田と表記）で、充真院は駕籠から降りて歩きながら景色を眺め、短歌を詠んだ。[8] それは四月二十三日の午前中で、幸い天気が晴れていた。勢田では「ここより歩行して、世田之橋を渡り、名にしおふ八景うちと思へは、よく見んと手かさはうるさく見るに、あら〳〵と用意したるかふり笠を初てかふり行」[9]と、有名な近江八景の地なので充分眺めようと、目の上に手をかざしたものの見づらいので、用意していた被り笠をこの旅で初めて被り、勢田の橋――唐橋――を歩いて渡ったのである。唐橋は、『近江名所図会』に絵入りで紹介された、著名な名所の一

つで、短歌や俳諧にも詠まれた地である。[10] 右から充真院が近江八景を訪れる事を、従前から楽しみにしていたことがわかる。実際に見た景色は「聞し通けしきもよき」と、既に聞いていた通り良い景色であり満足した。[11]

当地でとりわけ充真院の心を打った景色がある。それは「右之方は広き湖、左は近く家有て、又木立の茂り、水上には小魚多むれて有所」というように、右に琵琶湖が広がり、左には湖の近くに家があり、さらに木立が湖の際に生い茂り、湖面に小魚が群れている景色である。この描写に続き「何ともいわんかたなく心ともなく立とまり、しはらく詠」と、その景色は言葉に尽くせないほど充真院の心を揺さぶったので、暫く立ち止まり眺めながら、心に溢れ来る思いを短歌に詠んだのである。短歌を詠みたくなる程、充真院にとって心に響く景色であり、その感動の大きさが伝わってくる。

海から太陽が昇る景色にも、たいへん感動した。五月二十日に鞆の浦を出港してから暫くすると、「東之方晴渡り、さわるへき山もなけれは、よく日の出拝され、其気色いわんかたなし」と、海から日の出が昇る景色は言葉に出来ないほど美しく、感動した様子を文章と挿絵に留めた。[12] 充真院が長年過ごした江戸は、東に房総半島があるため海から昇る日の出は見られない。かつて充真院が江戸から離れた地に出かけたのは、天保十年（一八三九）に菩提寺の光明寺参拝の為、鎌倉を訪れた時であるが、鎌倉も江戸と同じく東に房総半島が横たわっているため、半島に遮られて海からの日の出は見られない。したがって、充真院にとって海から昇る太陽は、おそらく人生において初めて見る光景であり、絶景と感じたと思われる。

海辺の景色としては、延岡に到着した六月一日に、延岡の入り口というべき方財浜で海辺の景色に心を奪われた。「かた〳〵はほうさい之浜、かた〳〵は山に、前々の所には岩有て、夫に波の打かゝる気色、いわん方なく面白くて、少しよひし心地もうち忘て、下へおり詠」と、一方に方財浜があり、反対側には山が見え、浜辺にある岩に波が打ち寄せている景色が、言葉にできない程、趣を感じた。そして、充真院は浜辺に下りて景色を眺めながら短歌を詠んだのである。[13] 充真院は初めて国入りした延岡で、早々と感動する景色に遭遇し、未知の延岡に好感を持てたことであろう。

充真院は夜景にも感じいった。月明かりに照らされつつ提灯を頼りに進む夜間通行を、四月十六日に篠原付近（遠江国）で体験した。「私は月を供とし行故、昼よりもよしとおもふ」と、月を供として進むことを、風雅に感じている書きぶりである。[14]

夜景についてもう一例、ふれておこう。五月十五日に金刀比羅宮に参詣に向かう駕籠から見た風景に魅せられた事は前述（六章）したが、一本道を進みながら青々と広がる早苗を目にした充真院はその景色に心を打たれ、短歌を詠んだ。充真院はこの風景の彼方に金刀比羅宮が鎮座する山を見つけ、「夜分はさそな蛍にても飛てよからん」と、夜景に思いをめぐらせた。[15] 幸い金刀比羅宮の参詣から戻る際、再びこの道を日暮れに通り、充真院が思い描いた夜景を実際

に見ることができた。その様子は「段々暮行まゝ、初思ひし田面には蛍飛かふさま」とある。しかも「夫に十五日の事故、月もよくあらわに見へ」と、夜空に十五夜の満月が煌々と昇り、趣を添えたのである。その後も「月もよく遠山の姿もあり〳〵と見へ」と、月明かりに照らされた夜景を楽しんだ。

美しい風景について簡潔に記述した事例を、まとめて示しておこう。舞坂・天竜の渡し（遠江国）を四月十六日に通過した際、付近の景色を「爰の気しきよき」、兵庫（摂津国）の湊を五月七日に訪れて「よき気色」と評した。五月十九日には鞆の浦から舟を出して「おき出四方の気色詠おる」と船上から眺めた海原の景色を短歌に詠んだり、蒲江の湊に到着した五月二十八日には、「随分四方の気色よく、山々のおもしろく見ゆる」と、各地で風景を楽しんだ[16]。

充真院が心魅かれた風景は、以上に掲げた様に自然を主とした景色である。それ以外に心魅かれた対象として、大坂の町中を美しく着飾った人々が行き通う姿がある。しかも、この人通りを眺めて短歌を詠んだ。それは、四月二十七日に大坂で上様が通行するのを充真院らも眺めようと町に出かけた時の事である。上様とは十四代将軍徳川家茂である。徳川家茂は公武合体の為に上洛し、四月二十七日には大坂城に滞在していた[17]。

道に大勢集まった当地の人々の装いについて、「大坂とてとれもきれゐにつくり立居、帯は娘は皆結下けにして、何ても紅くうつくし」と、大坂の人々も上様を見るに際しては敬意を表して綺麗な身繕いをする事、とりわけ娘たちの帯の紅色が美しい様子に充真院は目を奪われている。そして「今たくれされは、しはらく人通りを詠かへりぬ」と、日暮れ前の道行く人々を短歌に詠んで帰宅したのである[18]。

折しも日暮れ前であり、真昼とは異なり黄色みを帯びた夕方の光の中で見る大坂の人々の華やかな装いを、充真院は好ましく感じたのである。故に、綺麗・美しいという表現を重ねているのである。色彩感覚は地域によって差異があり、江戸と大坂では異なるので、充真院が大坂の人々の装いを美しいと感じた点は少し意外である。充真院は日頃、絵を描く事に親しんでおり、その趣向を通して培われた色彩感覚が、鮮やかな色に対する感動を深くしたのではなかろうか。なお、四月二十四日の七つ時（午後四時頃）に充真院は大坂の町を船中から眺め、神社に参詣に行く様な装いで土手の上を通る当地の人々の姿を目にして「大分美しき人多通り」と簡潔ながら賛辞を記している[19]。

充真院は端午の節句である五月五日にも、大坂の人々の身繕いや装いを見て、次の様に記録している。「節句の事ゆへ誰も〳〵けわひして、娘・小共は美しうあかき色のものゝはやり候所とて、髪にもえりにも帯にもこし巻にも皆あかく（中略）、地合は何か知れぬとも、ひわと紅の段染の絞りの帯多、紅ちりめん（ひカ）ころうも見へ[20]」。

右から、端午の節句なので皆が化粧を施していることや、娘や子供たちの間では美しく赤い色が流行しており、髪飾りや襟、帯、腰

巻などにも赤い色を用いていること、鶸色と紅の段織の絞りの帯を締めている者が多いことなどに充真院は注目した。人々の美しい装いと身に纏った衣装や飾り物の赤い色が、充真院には綺麗で好ましく思えたのである。

前述（四章）したように、充真院は大坂の人々の物見高い気質に閉口し、嫌な土地柄という印象を持つに至るが、当地に好意的な感想を持った数少ない事柄が女性や子供の装いと色彩であり、町中の風景の一こまであった。

ここまでに紹介した充真院が感動した風景を振り返ると、充真院が風景への思いを短歌にしたためる様子が度々確認できた。充真院は文学的素養を有した人物であり、短歌を詠む以外にも、源氏物語にも造詣が深く、さらに様々な分野に及ぶ広範な書物を読んでいた。[21] 初めて訪れた土地で目にした風景や散策地の中で、文学に関する記載が散在しているので、まとめて紹介しておこう。

短歌に関しては、四月十日に湯本の福住で休憩をした際、小座敷で江戸の歌人の短歌をしたためた短冊の張り混ぜを見つけた。その様子は「小座敷には江戸なる歌人のより合成たにさくのはりませ」とあり、さらに「是は夏陰・定良・游清を初、我知れる人書たるの多ゆへ、こゝにてあへる心しておもしろく、昔恋しく思ひて、いとゝめもとまり」と、充真院が知る木村定良や本間游清などの歌人の作品が多く、この場所で作者らに遭ったような気持ちがして興味深く、かつ懐かしく思い、存分に短冊を眺めたのである。[22]

発句と絵の張り混ぜ屏風を、五月十五日に金刀比羅宮に行く途中で休憩した家で目に止めている。これは「文晁の蝶の絵、南湖の山水、南岑の人物を初、我しれる歌よみの大人発句いろ〳〵名高人多帳(張)有」と、著名な絵師である谷文晁や春木南湖らの絵と共に、充真院が知っている著名な発句が沢山張ってあった。[23] 思いがけぬ所で、著名な人物の作品群を見て、充真院はうれしさに心をときめかせた。「うれしくて、よく書留度は思へと、旅にしあれは致かた無過ぬ」と、うれしく思い、大家による作品を書き留めたかったが、参拝が控えているので写す時間が充分に取れずあきらめた。[24]

短歌に所縁の地を訪れて、景色を眺めた事例を示しておこう。まず、大坂の高津宮――高津神社――である。高津宮は『摂津名所図会大成』にも記された大坂の著名な名所の一つである。[25] 当地は、かつて充真院が読んだ『東海道中膝栗毛』（後述）で、弥次郎兵衛と北八が訪れて遠眼鏡で景色を眺めた場所でもある。[26]

充真院は四月二十八日に大坂の町を見物した際に高津宮に立ち寄った。「此高津の宮と申奉るは歌にも有」と充真院が記したように、短歌に詠まれた地である。[27]「高きやに登りてみれはの御詠被候天子様を祭り宮にて」とその短歌の冒頭とこの短歌を詠まれた天子様を御祭りした社が建立されていると充真院は続けて記している。[28] 充真院が天皇御製の冒頭のみ記したのは、当時、たいへん著名な短歌であり、全文をしたためる必要がないからである。この御製の全文は「たかき屋にのぼりて見れば煙たつ民の竈はにぎはひにけり」で、

『新古今和歌集』に収載されている。[28]

高津宮は本社に仁徳天皇をお祀りしている。実はこの短歌は藤原時平が仁徳天皇の事蹟を偲び詠んだ作の誤伝であるが、平安末期以来、仁徳天皇御製といわれていた。[30] したがって、充真院の理解は当時一般の認識なのである。充真院は石段を登ることが体力的に辛く感じ、本社がある場所までは昇らなかった。途中の茶屋のような所に立ち寄り、「御歌の躰のやうに向ふ見はらしけれと、昔には似す」と、天子様がこの短歌を詠まれたと言われている場所から実際に向かいの景色を眺め、現在はすっかり様子が変わっていると感想を記した。[31] 充真院は当時、仁徳天皇の御製と言われていた短歌に読み込まれた景色とは異なる様子を自らの目で確認したのである。充真院の実証的・考察的な姿勢が窺がわれる。

もう一例、短歌に所縁の地を見ておこう。それは、四月二十三日に訪れた大津（近江国）の蝉丸神社下社の境内にある関の清水である。充真院は「関の清水は歌にもよめる故、見度おしへくれと申付」と、当地を見聞することを希望しており、到着したら知らせるよう命じた。しかしながら、「今は名計、跡は無由、去なから昔の名残りて石垣のみ有」とのことで、現在は見所がないと言う事なので、見物を断念せざるを得なかった。なお、充真院は「人丸之御堂有て」と記しているが、正しくは「蝉丸」とすべきである。[32]

源氏物語に関する景色や見聞は、四月二十三日に石山寺を訪れて、紫式部所縁の品を見物し、境内の図を記載したことや、五月十九日に鞆の浦で魚を入れた飯台を頭上に掲げて売り歩く女性たちを見て、「源氏須磨の巻にも有」と、源氏物語の一場面を思い出したことなどがある。[33]

その他の文学については、四月十一日に沼津（駿河国）で滑稽本として名高い十辺舎一九著『東海道中膝栗毛』を思い出す。「沼津にかゝれは、長き松原のうち、弥次・幾(畿)太八之事思ひて、定めしこゝらにておかしき事あらん抔思て」と、当地の長い松原を進みながら、主人公らが愉快な事をしたのはこの辺りであろうかと、思いを巡らせた。[34]

本章の最後に、充真院が行動や場所から文学を連想した様子をあげておこう。四月十五日に見附（遠江国）を過ぎた辺りで、読本の伊丹椿園著『女水滸伝』を思い出した。充真院と御付きの女性たちが、男性らに内緒でお酒を飲んだ様子が、「女水こ傳之内に有、山中にて三世姫とらるゝ所にて、とく酒をのみし所の様子によく似て思い出られ、その絵くみによく似よりおかしう」と、『女水滸伝』の描写、および挿絵に似ていると感じ、面白く思ったのである。[35] その他、四月十八日に矢作（三河国）で兼高長者の屋敷跡に創建された誓願寺を訪れ、長者の娘である浄瑠璃姫と源義経の悲恋物語に思いをはせたり、所縁の品々を見ている。[36]

（1）充真院が短歌に親しんでいたことについては、拙稿「蔵書」の五～八頁。

（2）明大翻刻本、一二頁。

（3）知足寺については、『大日本地誌大系　新編相模国風土記稿』第二巻、二八九～九〇頁（雄山閣、平成十年）や、『全国寺院名鑑』北海道・東北・関東篇、四三二頁（全日本仏教会寺院名鑑刊行会編纂、昭和五十八年）に詳しい。
（4）明大翻刻本、二一～二頁。
（5）右同書、二二頁。
（6）右同書、二三頁。
（7）右同書、二五頁。なお、茶を飲みたかった充真院ではあるが、船中で茶を飲む用意をしていなかったので、その希望は叶わなかった。
（8）充真院はこの旅で、近江八景の地である勢田と石山寺を訪れた。充真院が石山寺を参拝した件は、拙稿「蔵書」の一二～四頁で紹介した。さらに、本稿の第十章でも簡単にふれた。
（9）明大翻刻本、三二頁。
（10）勢田の唐橋については、『近江名所図会』（柳原書店、昭和四十九年）の六七～九頁に説明と図がある。
（11）明大翻刻本、三二頁。以下の当地に関する引用も同頁である。
（12）右同書、七一頁。
（13）右同書、八三頁。
（14）右同書、二五頁。
（15）右同書、六二頁。以下に続く同地の夜景の引用は六七頁である。
（16）舞坂・天竜については右同書の二五頁、兵庫の湊は五七頁、鞆の浦は七〇頁、蒲江は七六頁に記載がある。
（17）当時の徳川家茂の動向については、『新訂増補　国史大系　第五十一巻　続徳川実紀　第四篇』（新装版、吉川弘文館、平成十一年）に詳しい。徳川家茂は文久三年（一八六三）二月十三日に江戸を発ち、三月四日に京都の二条城に到着し、以後、数度にわたり京都御所に参内したが、四月十九日には大坂に御成をして二十一日に大坂城に到着した。したがって二十七日には大坂城に滞在していたのである。なお、翌二十八日には和泉国・紀伊国・淡路国の海岸に御成をしている（右同書、五六一～五九三頁）。
（18）明大翻刻本、三八頁。
（19）右同書、三七頁。
（20）右同書、五四～五頁。
（21）充真院の文学的関心については、拙稿「蔵書」で蔵書の分野を分析した。源氏物語については八～一二頁。様々な分野については四頁。
（22）明大翻刻本、一五頁。
（23）右同書、六一頁。
（24）右同書、六一～二頁。
（25）高津神社については『摂津名所図会大成』巻之四に記載がある。当該箇所は『摂津名所図会大成』其ノ一（柳原書店、昭和五十一年）の二三八～二五二頁である。
（26）高津神社に関しては『東海道中膝栗毛』八編上にある。当該箇所は『東海道中膝栗毛』（日本古典文学大系六二、岩波書店、昭和三十三年刊）の四三六～八頁に挿絵と共にある。
（27）明大翻刻本、三九頁。
（28）右同書、三九頁、四一頁。なお、四〇頁は全て挿絵で文章はない。
（29）当該短歌は『新古今和歌集』の巻第七・賀歌に収載されている。『新古今和歌集』（新日本古典文学大系一一、岩波書店、平成十四年）では、二〇九頁にある。
（30）右同書、同頁の補注による。なお、藤原時平は「高殿に登りて見れば天の下よもに煙りて今ぞ富みぬる」と詠んだ。
（31）明大翻刻本、四一頁。
（32）右同書、三四頁。なお、蟬丸社と関の清水については、『近江名所図会』巻之一に記載がある。当該箇所は、『近江名所図会』（柳原書店、昭和四十九年）の八～一〇頁。
（33）石山寺については明大翻刻本の三三頁、魚を頭上に掲げて販売する鞆の浦の女性たちについては七〇頁である。なお、石山寺に参詣した件は、拙稿「蔵書」一二～四頁で紹介した。
（34）明大翻刻本、二〇頁。沼津の海岸にある松原や当地での出来事は、『東海道中膝栗毛』二編上にある。当該箇所は『東海道中膝栗毛』（日

本古典文学大系六二、岩波書店、昭和三十三年刊）の一〇二～四頁である。

（35）明大翻刻本、二五頁。なお、『女水滸伝』や前述した『東海道中膝栗毛』は、現在、明治大学博物館が所蔵する充真院の蔵書群の中には存在していない。『五十三次ねむりの合の手』の記述により、充真院が右の二冊を読んでいたことが、今回新たに確認できた。現存する充真院の蔵書には、人情本の『江戸紫』や『花鳥風月』（両本の所蔵と架号は、前者が明治大学博物館所蔵、内藤政道氏寄贈書の（三）充真院（繁子）関係（Ⅱ））の二五で後者は三七である）などの娯楽的な小説が現存するが、これらに加えて滑稽本や読本などにも充真院は親しんでいたのである。

（36）明大翻刻本、二七～八頁。

十一　敬虔な信仰心

充真院は厚い信仰心を持った人物でもある。信仰に関しては、日頃から身についている信仰的な行為、内藤家の先祖に対する崇敬、参拝した寺社などの三点から見てみよう。

日頃から身についている信仰的な行為に相当するのは、日の出・日の入りを拝む、念仏を唱えるなどである。日の出を拝む行為は、特に長い行程が予定された日に日の出前から出発した際、太陽が昇る瞬間に出会い、ありがたく拝んでいる。日の出を拝んだのは、草津・亀島・多度津などである。

草津では、四月二十二日に「明日は早く出立との事にて休候」と、翌日の早朝からの出発に備えて早く就寝し、二十三日の朝は「少しも早き方よしとて、朝しらみし比支度して、此宿を立て」と、夜明け前で空が薄明るくなりはじめた頃に宿泊地を出発した。そして「松なみにて日の出拝し行」と、松並木に差しかかった辺りで日の出となり、これを拝んだという。[1]

亀島（播磨国）では、明石と灘の海上を五月十日の日の出前に舟で通り、亀島付近から海の彼方に見える山越しに昇ってきた日の出を拝んだ。[2]多度津（讃岐国）では、同十五日に金刀比羅宮に参拝するので「くらきうちより支度して船に乗て、日の出之所ゆへ拝し有難て」とある。[3]なお、亀島と鞆の浦を出港して見た日の出は感動がひとしおだったようで、充真院は挿絵も描いた。[4]その他、前述（九章）した鞆の浦は、五月二十日に日の出を拝んだ。

夕日を拝んだのは、四月二十八日に大坂見物をしてから帰路を急いでいた時である。ちょうど日の入りとなり、「西山へ日の入よふおかまれ」と、山際に沈み行く太陽を拝んだ。[5]

念仏を唱えたのは、四月十日に箱根の芦ノ湖畔にある地蔵尊に立ち寄った時である。「誠に哀にてひとりてに念仏出る」と、哀しい気持ちが心に満ちて、自然に念仏を唱えた。[6]不安で念仏を唱えたのは、五月二十九日に蒲江を出港してから海がたいへん荒れた時である。「ゆれる時はおちんかと心つかひ、つよく波の上る時は念仏計」と、荒波に揉まれる船の中で、特に大きな波が打ち寄せると、念仏ばかり唱えて過ごしたという。[7]

充真院は船が大揺れする事を大変恐ろしく感じており、右に先立つ五月十七日に六嶋に船懸りをした際にも、念仏を唱えたと推測される形跡がある。八つ時（午前二時頃）頃から風が激しくなり船が大きく揺れた為、恐ろしくて眠れなかったのである。その様子は「舟もゆれ、ねふり候事もこはくて出来兼、おき居ても何のせん無なから、床の上におき、信心のみいたし居」とあり、恐ろしさを回避すべく信心にすがったという[8]。すなわち念仏を唱えたと見なしてよかろう。

内藤家の先祖に対する崇敬は、鎌倉の光明寺と大津の大練寺への思いと行動から窺がわれる。菩提寺の光明寺に対しては、延岡へ旅するに先だち、もしくはその旅の途中に光明寺に参拝できなかった事に対して無念さを繰り返し思いおこしている。無念の思いは、旅の三日目である四月八日に、平塚の浜辺から東の海上に幽かに江ノ島を見た時につのった。

充真院にとって、江ノ島とは光明寺を連想するものである。かつて天保十年に光明寺の内藤家廟所を参拝した帰路に、足を伸ばして江ノ島詣をしたからである[9]。さらに言えば、充真院の意識の中で光明寺と江ノ島が同義であることに加えて鎌倉も同義であり、充真院が鎌倉と表現した場合も、光明寺のことを指す。

充真院は「秋にも成て立事ならば、鎌倉・江の嶋にもゆる〳〵と拝しもせんに、かやうなる事にて立し故、いたし方なしと思ひつゝけ」と、延岡への旅立ちが秋であれば鎌倉と江ノ島にも参拝できたが、急に旅立つこととなったので参拝できないのは仕方ないと思い続けていたという[10]。仕方ないと自分の心に言い聞かせる機会が度々であった程、充真院は参拝できない事が心残りだったのである。その残念な気持ちを「こたひの事よりしては兼ての願も叶はす過るに心をいため」と、急な旅立ちなので、光明寺に参拝したいという以前からの願いが叶わないままである事に心を痛めていると、心情を吐露している。

光明寺には内藤家の歴代藩主を主とした先祖らと共に、充真院の夫であり天保五年（一八三四）に三十七歳の若さで亡くなった藩主政順も葬られている[11]。内藤家の先祖、及び亡き夫に別れの挨拶を告げに参拝することが出来なかったので、「まつ是より見ゆるも有難さふしおかみ」と、平塚の浜辺から江ノ島が見える事をありがたく思い、光明寺がある鎌倉の方向を伏し拝んだのである。

その後も、四月十日に箱根で「かまくらへさえも参詣成かねし事なる」、さらに四月二十三日には大津で「立時に鎌倉へ参詣を思ひしを、此のさわきにてゆかれす」、五月六日に大坂の川口から船で瀬戸内海に出てからも「俄に立し事、兼ての願の鎌倉へも参詣さへもはたされすと思ひ、うつら〳〵とねもやられねす」と、時折、心残りな思いが脳裏に去来して胸を痛めている[12]。右の様に充真院が光明寺参拝が出来ずに江戸から離れた事を繰り返し後悔しているのは、内藤家の祖先らへの崇敬の念が厚いからこそである。しかも当初、この旅は充真院と光が延岡に永住する為であり[13]、さらに「故郷へは

此年も重し事故、またと行かれし」[14]と充真院は当時六十四歳であり、高齢なので江戸には二度と戻れないと思っていた。故に先祖らに今生の別れが出来なかったことは、取り返しがつかないと意識しており、ひたすら申し訳なく思っていたのである。

一方、この旅で当時、内藤家が参拝していなかった大練寺を訪ねることができた[15]。大練寺には歴戦の勇者として名高く伏見城の戦いで亡くなった内藤家長の墓と位牌があり、充真院はこれらを拝んだ。充真院は三井寺を訪れて近江八景の一つである三井晩鐘として名高い当寺の釣鐘堂を見たかったのだが、それよりも内藤家の先祖の墓がある大練寺に参拝する事を優先するべきと判断して、先に大練寺に向かった。充真院は何よりも先祖の墓所を参拝することが大切と考えているのである。結果としては、時間の余裕が無くなり三井寺に参拝できなかったが、内藤家の先祖への御参りを無事に果せた。

その他、内藤家の大坂屋敷の敷地内に祀られている屋敷神の「稲荷様・生目様・八天狗様」を、五月一日に参拝した[16]。大坂屋敷に到着した直後は参拝する頃合が無く、四月二十七日は夕方に屋敷神を祀る御宮の外観を見るに留めたが、五月一日に参拝が実現したのである[17]。

充真院は屋敷神を祀る御宮の略図と大坂屋敷の見取図を描いており、関心の深さが窺がわれる[18]。見取図から屋敷内における御宮の位地――玄関から見て一番奥の庭にある――が確認できる。大坂屋敷の屋敷神は、石製の鳥居が三・四基と多数の石灯籠があり、額堂に奉納してある額類も大きく、江戸の内藤家の屋敷神の御宮よりも立派な仕様であるという[19]。充真院は「誠に〳〵御りっは成御宮之かゝり」と、見事な様子に感心して詠嘆を込めて表現している[20]。

道中において充真院が参拝した寺社を、以下に列記しておこう。四月十日に芦ノ湖畔の箱根権現（現、箱根神社）と賽の河原の地蔵尊、十一日に三嶋明神（現、三嶋大社）、十八日に誓願寺、二十日に石薬師、二十一日に関の地蔵尊、二十三日に石山寺・大練寺・稲荷神社（現、伏見稲荷大社）、二十八日に高津宮・安居天神・清水観音、一心寺、天王寺（現、四天王寺）・住吉大社、五月三日に本願寺・天満天神（現、大阪天満宮）、九日に人丸社（現、柿本神社）、十五日に金刀比羅宮などである。なお、代参者を派遣した場合もあり、五月八日に人丸社、十四日に金刀比羅宮、十九日に観音（福禅寺）などに代参者を派遣している[21]。

転居を目的とした旅とはいえ、東海道沿いや滞在した大坂の著名な寺社に数々立寄り参拝を果たしていたのである。寺社参拝は信仰心に基づくものであるが、同時に娯楽的な要素もある。充真院は多くの寺社を参拝することにより、過酷な旅の日々に楽しみを見出せたと思う。そして、長い船旅の海上安全を願うために立寄った金刀比羅宮への参拝は、この旅における最後の参拝となったのである。

（1）二十二日は明大翻刻本の三一頁で、二十三日は三二頁。
（2）右同書、五九頁。
（3）右同書、六一頁。

（4）拙稿「日向国延岡藩内藤充真院の旅日記から見る関心と人物像――『五十三次ねむりの合の手』を素材として――（1）」（『城西大学経済経営紀要』第三〇巻、平成二十四年）第二章、八頁。
（5）明大翻刻本、四八頁。
（6）右同書、一八頁。
（7）右同書、七七頁。
（8）右同書、六九頁。
（9）拙稿「鎌倉旅行」六一～二頁。
（10）明大翻刻本、一一頁。以下に続く平塚での無念の思いに関する引用も同頁。急な旅立ちだった様子は、「下士以上由緒書」に掲載されたこの旅に同行した藩士の記事から確認できる。側医の喜多尚格は、四月一日にお供を命じられた。長年充真院の身近に仕えている喜多が、出立の五日前に、しかも家族も同日に出立するよう命じられているのである。さらに、斉藤牛太郎智高も四月一日に同行を命じられた。しかも、同三日に井伊家に呼ばれてこれまで充真院によく仕え、出立準備にも尽力し、さらに延岡にお供する事を感謝されて、褒美を授与された。褒美の授与は旅の三日前であり、慌しい旅立ちだったことが窺がわれる。ちなみに、天保十年の光明寺参拝の旅は、お供の多くが同年三月十六日に随行を命じられた（拙稿「鎌倉旅行」四〇～一頁）。その節の任命日は当初の出発日である三月二十八日（後に支障が生じ、四月四日に延期）の十二日前であり、文久三年の旅のお供の任命日よりも余裕があった。このことからも、文久三年の旅が永住としての転居、かつ長期間の旅である事を考え合わせると、如何に慌しい旅立ちだったかがわかる。
（11）拙稿「鎌倉旅行」、三三頁。
（12）箱根については明大翻刻本の一三頁、大津は三四頁、大坂川口は五七頁。
（13）「下士以上由緒書」九巻に収載された斉藤牛太郎智高の文久三年四月一日の記事に、「充真院様　光姫様、此度御在所江御永住被遊候ニ付御供…」とあり、充真院と光姫は以後、延岡に永住すると内藤家および藩士たちは認識していた。
（14）明大翻刻本、五七頁。
（15）明大翻刻本、三四頁。大練寺参拝については拙稿「蔵書」五～六頁でふれている。
（16）明大翻刻本、四九頁。
（17）四月二十七日の記事は右同書の三九頁、五月一日の引用は四九頁。
（18）右同書、四〇頁。
（19）右同書、四九頁。
（20）右同書、三九頁。
（21）充真院が参拝した寺社について、明大翻刻本の掲載頁を示しておこう。箱根権現と賽の河原の地蔵尊については一八頁、三嶋明神は一九～二〇頁、誓願寺は二七～八頁、石薬師と関の地蔵尊は三〇頁、石山寺は三二～四頁、大練寺と伏見稲荷は三四頁、高津宮は三九頁、四一頁、安居天神と清水観音は四一頁、一心寺は四一～二頁、天王寺四四～五頁、住吉大社は四四頁、四六～七頁、本願寺は四九頁、天満天神は五三頁、人丸社は五九頁、金刀比羅宮は六三～六頁である。代参は、人丸社は五八頁、金刀比羅宮は六一頁、観音は七〇頁である。なお、伏見の稲荷神社については「伏見へ参詣して悦ぬ」と、「伏見」と地名しか記していないが、具体的に名称を記さずともわかる最も有名な当地の参拝地といえば稲荷神社なので、これとみなしてよかろう。なお、三嶋明神参拝については伊能論文の二九～三〇頁で紹介されている。

おわりに

以上、「五十三次ねむりの合の手」を概観して、充真院の立場、同行者との関係、心身の様子、庶民とのふれあい、食や名物、風景

への感動と文学への思い、寺社と信仰などを検討しながら、充真院の関心と人物像を探ってみた。この旅から窺がわれる充真院の関心は、初めて見る各地の風景や名所、寺社、地域の人々、名物などに向けられていた。充真院は様々な事物を興味深く観察して、読書や伝聞により既存の知識としていた各地やその事物について、実際は如何なる様子なのか、自らの目で確認してその機会を有効に過ごした。充真院は好奇心旺盛な性格であるが[1]、この旅でも、初めて目にする事物や風景をよく観察して詳しい文章と挿絵に書き綴った様子は、まさしく知的好奇心の成せる技といえよう。

最後に、本稿で明らかにした充真院の人物像をまとめておこう。身体面は、高齢で年齢相応の体力・視力の衰えもあり、さらに駕籠や船の揺れで体調不良に苦しみもしたが、総じて見れば、過酷な長旅を健やかに過ごしており、年齢にしては健康な身体の持ち主だったといえよう。尤も、明るく前向きで好奇心旺盛な性格が、年齢を補っていたといえる。なお、暑さが苦手であり体調に影響する事があった。

性格はどちらかというと、さっぱりしている。旅の初めは生まれ育った江戸に二度戻る事ができないと思い悲痛にくれていたが、しばらくすると気持ちを切り替えて、見聞を楽しむようになった。気持ちの切り替えの早さを持ち合わせた、さっぱりとした気質といえよう。辛い事や不測の事態が起きても、最終的には笑いに変えてしまう、前向きで楽天的な心の持ち主でもある。

歌舞音曲を御附の者や宿・茶店の者たちと共に、三味線や琴、拳を楽しむなど、賑やかで陽気な人柄でもある。折々に喜び・悲しみ・不安などの気持ちを率直にしたため、御付の者に心情を吐露する様子も見られ、心の素直さも感じる。不快や辟易の念が生じても、激しい怒りの表明は確認できず、忍耐強さや、穏やかを持ち合わせている。価値判断の基準は、生まれ育った江戸の有り様に基いていた。

対人面は、御附の者たちにおおらかな心で接し、失敗する者がいても泰然と対応しており、自らの立場に対する矜持が感じられた。周囲の者への気配りを心得ており、感謝の気持ちを忘れない謙虚さを持っていた。孫娘の躾を心がけながらも、溺愛している様子が垣間見え、子供好きで庶民の子供たちに慈しみのまなざしをむけ、女性たちに好意的であった。そして常にあたたかい心で人に接していた。

豊かな教養と細やかな感性の持ち主でもあった。文学に所縁の地では、かつて読んだ文学に思いを巡らせたり、自らの目で確認・比較して見聞を深めた。美しい風景を目にしては度々心を揺さぶられ、心にあふれくる感動を短歌に詠んだように、感受性の細やかさや豊かさが感じられると共に、創造力も兼ね備えていた。洗練された審美眼を有し、巧みな筆致と穏やかな色彩を好み、けばけばしい色彩が嫌いであった。文学や絵画に関する事物に遭遇することは喜びの糧であった。本稿の分析対象とした「五十三次ねむりの合の手」の存在自体、各地の描写と供に、挿絵も工夫して描いており、文筆の

才に秀で、かつ絵心を持っていた充真院だからこその賜物である。

食の嗜好は、赤飯と煮染が好物で、興津鯛のようなにさっぱりした魚類を好み、甘味は上品な甘みと風流さを兼ね備えた関の戸を好んだ。江戸時代の人らしい敬虔な信仰心を有し、道中で多くの寺社に立寄って参拝をした。内藤家の先祖に対して厚い崇敬の心を寄せて、当家が疎遠になっていた先祖の墓所に赴いた様に、婚家を尊重している様子が窺がわれた。

（1）　拙稿「好奇心」（一）（二）。

《Summary》

Concerns and Image of Naito Jushin-in (Nobeoka Domain, Hyuga Province) Observed from Her Travel Journal *Gojusan-tsugi Nemuri no Ainote* (2)

By Naomi KANZAKI

Here I derive the Jushin-in's noticeable position, personal relationships with her attendants, and physical and mental condition from travel journal "Gojusan-tsugi Nemuri no Ainote" written by Jushin-in, and furthermore, indicate her travel interests including meeting with ordinary people, pleasure of eating, attention to local specialties, admiration of sceneries and literature, and devotion for shrines and temples. By analyzing these, an image of Jushin-in is revealed as below. Despite a decline in stamina and vision, which was appropriate to her age, she was a person in sound body. She was frank and open with positive and optimistic personality and also patient and calm never letting her anger show. She behaved with a generous heart toward her subordinates and had pride in her position as well as humility to be grateful to those around her. She adored her granddaughter and looked at the ordinary children and women she met while traveling with tender eyes. As a well-educated and warm-hearted person, she wrote tankas being touched by beautiful sceneries and thought over literature remembered in connection with the places she visited. She also had a lively and cheerful aspect to love music and dance. With devout faith, she visited temples and shrines on her travels including the temple where there was the tomb of her ancestors from whom the Naito family had been estranged. As for food preference, sweet red bean rice, vegetables stewed in a soy broth, and sea bream were her favorites.